平成26年度

研究紀要

（第４８回　いちょう祭　発表部門　演劇部公演　コラニー文化ホール　*2014.09.22*）

甲府市立南西中学校

目　次

◇　はじめに……1

Ⅰ　研究の概要……2
・研究課題、研究内容、成果等の把握と検証の手だて、校内研究基本構想

Ⅱ　教科研究……10
○各教科の研究内容、授業改善プラン、一人一実践
・国語科(10)
・社会科(22)
・数学科(27)
・理　科(33)
・音楽科(45)
・美術科(48)
・保健体育科(54)
・技術・家庭科(60)
・英語科(66)

Ⅲ　拡大校内研究会について……79

Ⅳ　研究のまとめ　……89
①拡大校内研究会、校内研究に関するアンケートのまとめ
②研究の成果と課題および来年度の方向性

◇　雑　感（あとがきにかえて）…99

◇　研究同人…100

はじめに

校長　荻野　昭彦

本校は今年度，山梨県教育委員会「授業改善プラン実践事業推進校」（３年間）と甲府市教育委員会「甲府の子どもの総合推進校」「甲府市確かな学力推進校」（２年間）に指定され，学力向上を中心課題として，授業改善プランの構築と毎日の授業でどのような視点を大切にしたら良いか，また，今の中学生にはどのような力を育成しようとすべきかなど，検討してきました。

四月当初は，何をどのように整理したら良いのか，また，どのようなことに取り組んだら良いのか手探りでしたが，研究主任が意欲的にまた熱心にリーダーショップ発揮してくれたおかげで，多くの成果を得ることができ，また，幾つかの課題も明確になり１年目を終わろうとしています。

中心課題の「授業改善プラン」構築に関しては，各種検査のポイントの荒い出し方，点数や結果にこだわる際の視点や結果が出るまでにどんなことに取り組むべきかなど見えてきたと感じています。そして，それを覆い包む，毎時間の授業における生徒の学び合いをどう捉え，どう活性化・有効化するのかといった課題に向かって，徐々に方向性が絞り込めてきたと手応えを感じています。

当たり前のことですが，生徒の学力を向上させるためには，毎時間の授業の積み重ねが大切です。そして，当たり前のレベルを上げ，加えて自主学習や家庭学習につながることも願いながら，授業を中心とした教師や仲間と共感しながらの学び合いの有効な体験が一番大切だということです。

推進校の取組の一つとして，相模原市立上溝南中学校へ視察に行ってきました。そこで見た，生徒が主体的に学び合う姿は，私たちに目指す方向を示唆してくれるものでした。そのイメージを大切にしながら，今後研究を積み重ね，本校の生徒の実態に合った，有効な学び合いの姿を明らかにできたらと考えています。そして，そうした姿が日常的にどの教室でも見られるような授業が日日行えたらと思っています。

推進校１年目として拡大校内研(公開研究会)を忙しい中２回実施しました。これらを含め成果や課題を整理しながら１年目が終えられるのは，指導助言を快くお引き受けいただいた山梨大学教職大学院の堀之内睦男先生，また，受付までしていただいた甲府市教育委員会指導主事の寺田是先生・竜澤規之先生をはじめとした多くの関係する方々のご支援の賜と感謝申し上げます。また，規模的に人的余裕がない中，校内研究を大切にしてくれた本校教職員にもこの場を借りて感謝したいと思っています。

ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

Ⅰ.研究の概要

1.研究課題

(1)教科における課題
(2)生活習慣・学習習慣等における課題

2.研究内容

(1)授業改善に向けた手立て
①研究主題、主題設定の理由
ア　平成26年度研究主題
イ　主題設定の理由
②研究の柱となる方法及び具体的な取り組み内容
②－Ⅰ　研究の目標
②－Ⅱ　研究の方法と内容
(2)研究経過

3.成果等の把握と検証の手だて

4.校内研究基本構想

平成２６年度　校内研究の概要

【授業改善プラン実践事業　研究実施計画書（平成２６年度）】

１．研究課題

（１）教科における課題

昨年度の全国学力･学習状況調査によれば、国語、数学とも県全体及び全国と比べやや劣っているという結果が出ている。国語Ａにおいては、学習指導要領の領域等における『書くこと』で８．３%、評価の観点『書く能力』で８%県全体と比べ低く、国語Ｂにおいても同様に『書く』に関わる部分で差が見られる。問題形式においても選択式では５～６%程度の差であるが、記述式になると９．３%県全体より低くなることからも『書く』ことに関わる表現力やその下支えになる語彙（学習言語）の量に課題があることがうかがえる。また、数学においては、数学Ｂにおける『数と式』で８．７%県全体と比べ低く、全国とでは１４．９%低い、『数学的な技能』や『見方考え方』も約８%全国と比べ低い、また問題形式では記述式が、９．６%全国と比べて低い傾向を示している。数学における基本となる数や式に対する感覚を高め、数学的な見方、考え方につなげていくことが課題であるとうかがえる。

（２）生活習慣・学習習慣等における課題

基本的な生活習慣や自己肯定感など概ね全県、全国平均と同程度ある。しかし、就寝時間が０時以降になる生徒の割合が全県、全国平均に比べ１０%程度高く、ＴＶ等のメディアの視聴やゲーム、インターネット、情報端末の使用頻度や時間も全県、全高平均に比べ１０%程度高くなっている。学校以外での学習時間は、全県、全国平均と同程度であるが全くしないという生徒の割合が、全県、全国平均に比べ高い。また、休日においてはその差が更に大きくなっている。計画的な学習に対しても全くしていない生徒が２３%いる。また、朝読書以外では、１ヶ月に本を１冊も読まない生徒が３０%を超している。学校に行くのは楽しく思っている生徒は、全県、全国平均に比べ高く、友達に会うのが楽しいとほぼ同程度に思っているのだが、学習に対しては上述した通り意識は低いことがうかがえる。課題として考えられることは、家庭での学習習慣の確立や自由な時間をどのように自律的に使うのかを考えさせることにあると思われる。（このことは、突き詰めていくと『想像力と感受性』に行き着くのではないかと思われる。）

２．研究内容

（１）授業改善に向けた手だて

①研究主題，主題設定の理由

ア．平成２６年度研究主題

「確かな学力をはぐくむ授業の創造　～『聞くこと』と『書くこと』を意識した授業改善プラン～」

イ．主題設定の理由

（イーⅠ）昨年度までの経過

平成２３年度「確かな学力をはぐくむ授業の創造～生徒が意欲的に学ぶ授業づくり」平成２４、２５年度「確かな学力をはぐくむ授業の創造～教科の本質に迫る授業づくりと評価の工夫」と３カ年にわたり「確かな学力」をはぐくむ授業をどのようにつくっていくのかを主題として取り組んできた。このテーマへの移行は、Ｈ２３以前に行っていた「学びの共同体」からＨ２４より完全実施になる新学習指導要領を踏まえての研究へと舵を切ることで行われた。このとき「生徒の生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ、これらを活用し課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない」（教育課程編成一般方針より抜粋）の中にある３つが相互に関係し合いながら「確かな学力」がはぐくまれると本校では、定義された。

①教科における基礎的・基本的な知識及び技能とは何か。

②各教科における思考力、判断力、表現力とは何か。

③主体的に学習に取り組む態度とは何か。
また、どのように習得させるのか、はぐくむのか、養うのか、を探求しながら「確かな学力」を生徒に身につけさせようとしてきた。研究副主題が、《意欲的に学ぶ授業づくり》から本質に迫る授業づくりと評価の工夫》とかわってきたことは、教える側である教師が授業をどのようにデザインするのかをより意識してのことではないかと考えられる。

（イーⅡ）学校現場を取り巻く状況
◇『学校』という場
そもそも生徒は、自然発生的に学校に集まってきたわけではない。単に学区内に居住しているという偶然によって集合したにすぎない。何か共通の利益や同じ志を持った者が自らの意志で集まった集団とは明らかに違う。こうした学校の特異性が学校にとっての最大の利点でもあり弱点でもある。学校は、現代社会（消費社会・高度情報化社会）の中で唯一残された利害関係（損得、等価交換）を超えたところで存在する共同体的性質（農村社会的性質）を持っていると考えられる。この中で何が大切か、それは人間同士の信頼関係に他ならない。他を認めることが、自分自身の存在を確認する、そのことが学校の中には必要である。何か意図的な活動を仕組まない限りその集団に凝集性が生まれることはない。この集団を社会性のある集団とするためには様々な手段や方法を模索し、生徒をどう分析（理解）していくのかを考えることが必要になってくる。
◇社会的背景（浮遊化する現代社会、全てが現在化する社会）
バブル崩壊後の数十年来、既存の道徳観や価値観はもろくも崩れ去り、規範なき社会と言われて久しい。その中で、公立学校の位置（社会的地位）もまたその基盤を失い、権威を喪失してきているといわれている。このことは地域社会の喪失、核家族化、更には家庭の下宿化など我々をとりまく社会の状況の著しい変化を反映しているものとして考えらえる。こうした社会構造等を背景として不登校、学級崩壊、いじめ等の現象が特定の子どもや場所ではなく日本全国至る所で起こっている。このような現象は局所的な問題としてではなく日本社会全体をとりまく様々な要因（社会的、心理的、経済的など）が複合的にからみ表出しているのではないかと考えられる。
高度情報化または都市の電脳化（脳化社会）が進み、リアルタイムで欲しいものはすぐに手に入るコンビニエンスな時代になり、遠い国の出来事も自分の存在する場での出来事も同じようにその情報を取り扱うことができる。地球規模で全てが現在化しているといってよいのではないか。「今、こうだから、将来はだいたいこのぐらい」というように、だいたい見当のつく時代になったことによって、かなり先の未来像までが現在の状況と同一視されている。我慢をしたり、自己の未来に向け努力したりすることは格好悪く、適当に我が儘を言うのが格好いいとされる時代になってしまっているのではないか。生徒の語る言葉の中に「無理」「意味がない」といったものが頻繁に出てくるようになって久しいがこれらの言葉は、語り合う関係を切る言葉であると考えられる。また、無理であり、意味がないそのことの要因は、自己にあるのではなく、そういった無理な要求や、意味のないなげかけをする側にあると言っているのと同義ある。もっと端的に言えばやっても無駄という考え方である。やる前からその結果が見えていると考えている生徒が多いのではないか。さらに言えば、そうした感覚の中での人間関係は、他者に対して強いらないし、自分に対してもそうして欲しくない関係である。その半面、一人でいることに対しては耐えることができず、絶えず仲間を求める。情報ツール（携帯、スマホなど）の普及によりその範囲は、飛躍的に拡大している。

（イーⅢ）研究の基本的考え方
学ぶとは、「真似る」から始まる。誰もが初めは模倣の域を脱しない。繰り返し真似ていく中で、そこに自分らしさや考えが加味されることで最初とは違ったものに変化していく。我々はこれを生徒の変容と呼ぶ。「真似る」から生徒自身のものになった「本物」になるということである。発生学的に見ても個体発生は系統発生をくり返している。いきなり「ヒト」になるわけではない。学ぶ意志とは個の中に発生するものであるが、その学び方と

は過去に蓄積された先人の知恵や知識を習得した過程との相似といってよいのではないか。また、種としてのヒトから考えれば我々が学ぶのは、「本能」といってよい。もともとヒトは生まれつきの行動の仕組みが少なく、環境に適応する柔軟性において進化してきた。つまり、　外界についての知識を集積することで、個体の生存や種の維持を図ってきたのが我々の特性である。ヒトは学習する種である。考え、行動するは個別のものではない。我々の行動（意識されたもの）は全て脳によって統括されている。我々の回路には、５つの入力系（視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）と１つの出力系がある。出力系は、すべて筋肉の不随運動として表される。書くこと、読むこと等全ての表現活動は元をただせば筋肉の動きでしかない。意識される活動には必ずそれを行うに至った考え(大脳)が存在する。先にも書いたがヒトは学ぶこと、考えること、そして、それを表現しようとすることに種の存亡をかけている。そうしてみると一つだけ確かなのは生徒も何かを欲しているという事実である。それが特定の教科に対してではなくても何か本能的に学びたいと思っているはずである。問題は、何を投げかけ（学ぶ対象、教材）、何に取り組ませる（考え、行動させる）かにかかっている。逆に言えば、我々が何を学び、生徒に対してどのように意図的な取り組みを仕組んでいくのかが問われると言えるのではないかと考え、本主題を設定した。

②研究の柱となる方法及び具体的な取組内容

（②－Ⅰ）研究の目標

「確かな学力をはぐくむため、各教科における①基礎的・基本的な知識及び技能②思考力、判断力、表現力③主体的に学習に取り組む態度についての見取り（評価）を再度点検する中で、生徒の実態に応じた学習指導の方法を日々の実践を通して授業の改善を図る。」ために、具体的な目標を掲げる。

（１）　研究初年度の今年は、生徒の実態把握（授業改善のポイント）とそれに伴う授業改善プランを試行しながら授業実践を進める。

（２）　教科担任と学級担任、学年内での情報交換、教師同士の学び合いを通して、教科指導の実践力、学級指導の実践力を高め、学年の現状把握をすることで授業改善プランにつなげる。

（３）　国語、英語、理科を研究の中心とするが、その他の教科についても同様に、授業改善のポイントを明確にしながら、授業改善プランを作成し授業改善を進める。

（②－Ⅱ）研究の方法と内容

◇　研究の方法

・　教科研究部会を中心に、以下のア～ウに留意しながら研究を進める。

ア　研究主題を受けて、教科ごとテーマを設定して研究を進める。

イ　教科の特性を生かし、言語活動（読む、書く、描く、聞く）を取り入れた授業改善のプランを考える。

ウ　教科研究部会の成果は、全体研究会などの場で明らかにし、全体で共有する。

◇　研究の内容

・　授業改善プランの手立て

ア　「全国学力・学習状況調査」、「山梨県学力把握調査」等をもとに本校における生徒の学習状況の分析、また学習や生活習慣に関わる現状の把握を進め、授業改善のポイントを明確にする。

イ　言語活動に関わり、生徒が「聞く」とはどういうことなのか、教師の「発問」のあり方から考えていく。

ウ　授業を改善する上で、指導方法や教材開発を（イ）と関連づけながら考える。

（2）研究経過

時期（月）	研究内容，成果の公開，研究成果の検証等の予定
4	・第１回校内研究会　校内研究の概要について（4月１１日） ・全国学力・学習状況調査の実施（4月２２日）
5	・山梨県学力把握調査の実施（5月１３日） ・第２回校内研究会　授業改善プラン実践事業計画について（5月２３日）
6	・第3回校内研究会　教科研究部会（主題設定、研究計画等）（6月4日） ・第４回校内研究会　教科研究部会（６月２０日） ・昨年度の学力調査の結果の分析 ・ＮＲＴまたはＣＲＴ調査の実施（１年）
7	・第５回校内研究会　グループ別研究部会　全体研究会（７月４日） ・授業改善プランの検討 ・２学期に向けて、授業改善を各教科ごとまとめる
8	・夏季校内研究会（8月２２日） 午前：教科研究部会、グループ別研究部会、学年部会 午後：全体会「授業改善のポイントと授業改善プランの作成について」 講師：丹澤一浩指導主事、望月　陵指導主事
9	・第６回校内研究会（９月３日） 「校内研究の指針となる生徒に身につけさせたい力」について 教科研究部会
１０	・第７回校内研究会（１０月２７日） 拡大校内研究会（全体会、教科研究会） 研究授業：１年３組　英語科　　荻原裕昭　教諭
１１	・第８回校内研究会（１１月１４日） 拡大校内研究会（全体会、教科研究会） 研究授業：３年３組　理　科　土屋賢一郎　教諭 ２年２組　国語科　川原　理恵　教諭
1	・第９回校内研究会（１月２３日） 「アンケートのまとめと来年度の方向性」 研究紀要の作成について
2	・第１０回校内研究会（２月１３日） ＩＣＴ機器（オープンノート）のデモンストレーション 平成２７年度校内研究の方向性

3．成果等の把握と検証の手だて

（1）実施する調査

「全国学力・学習状況調査」（第３学年）
「山梨県学力把握調査」（第２学年）
「ＣＲＴ」または「ＮＲＴ」（第１学年）※予定

（2）実施日程

４月２２日（火）実施	「全国学力・学習状況調査」（第３学年）
５月１３日（火）実施	「山梨県学力把握調査」（第２学年）
６月実施予定	「ＣＲＴ」または「ＮＲＴ」（第１学年）

（3）調査結果の活用方法

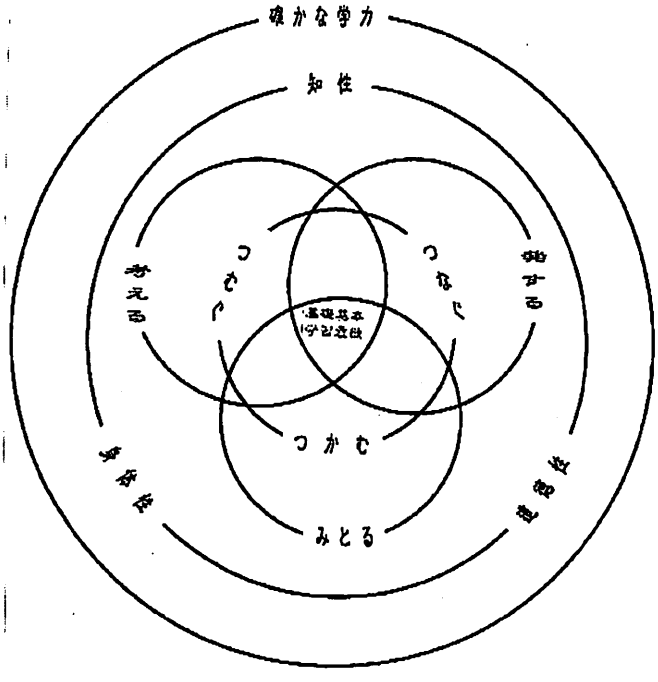
調査結果を基に本校生徒の学力及び学習状況の把握を行い、本校生徒の現状分析から授業改善プラン策定の参考及び指針とする。

4．校内研究基本構想

はじめに

『確かな学力』の中には、『基礎・基本の確実な習得』、『思考力・判断力・表現力の育成』、『学習意欲の向上』という三要素がある。これらの知的な営みと身体性や道徳性は、同時並行的にその時代性の影響を受けながら育まれるものであると考えられる。

南西中学校校内研究会では、基本構想図を以下のように定め、「活用」の部分である『思考力・判断力・表現力』に焦点を当て、授業改善を進めていきたいと考えている。また、本校独自の視点として『つかむ・つむぐ・つなぐ』を導入することで授業展開や授業観察の場に活用していきたいと考えている。



◇構想図のとらえ方

①「確かな学力」について

「確かな学力」については、昨年度の研究紀要を引いてみれば、そこには「確かな学力」を『基礎・基本の　確実な習得』、『思考力・判断力・表現力の育成』、『学習意欲の向上』の三要素がス　パイラル状に関わり合い、つくられていくものが「確かな学力」であると定義されている。これ　を身につけさせるためには、それぞれの教科が教科の目標（身につけさせたい力）を明確にして、授業の構成や生徒の変容を評価していくかということが、研究の主たる目標であった。三要素が　相互に関わり合うということは、例えば（学習意欲）が高まる→（基礎・基本）を身につけてい　く→（思考・判断・表現）が育つ、というように下位構造が上位構造を支えるという捉えではなく、それぞれを同時並行的に捉えていく考え方である。「確かな学力」の定義としては、このことを継承していくことで特に問題はないと思うが、ここでの「学力」は教科に限定的であることを下線部が示している。『学校』としての機能を考えたとき『教科学習』の習得が、その１番の目的であり社会を構成する市民として必要最低限の教養を身につけるためにも教科の学習が重要であることは言うまでもないが、もう少し幅広く「学力」を捉え、「はじめに」にあるように、「確かな学力」とは知性、身体性、道徳性が同時並行的に、絡み合い、もつれ合いながら、その時代性の影響を受け育まれるものと南西中学校校内研究会では定義した。

②「つかむ・つむぐ・つなぐ」について　－授業構造、生徒が臨む姿勢としての、３つの「つ」－

◇つかむ（摑む）

課題をつかむ、うけとめる、理解するなど『受容』するということ。まずは、学習を受け止めさせる、学習意欲を喚起させる。

◇つむぐ（紡ぐ）

『受容』したものから何をつむぎださせるのか、つむいだものをどう表現させていくのか。できるだけ切れることなく紡ぎ出すにはどのようにさせるべきなのか。間違ったものを紡いだとき、それをどのようにいかしていくのか。学習に対する思考の方法、概念の構築。

◇つなぐ（繋ぐ）

紡がれたもの（知識・理解）がどのようにつながっていくのか、つなげていくのか、他者の紡いだものとどうつながっていくのか。正しく思考され、判断され概念形成がなされているかを相互関係の中から身につけさせていく。また、共感や共生，寛容といった学習空間（生活空間）の雰囲気（環境）をつくっていく。

③「みとる・考える・発する」について －生徒と教師の能動的な行動としての、３つの「る」－

◇みとる

「みとる」とは、対象を捉え判断することである。様々な過程の中で内容をどのように捉え、判断し、摑んでいくのかを個々や集団として評価できること、することと捉える。

◇かんがえる（考える）

考えることは、私たちヒトとしての大きな特徴である。「考え」は言葉として想起され、感受され表現されていく。すべての言葉は、自分自身が考えついた言葉ではなくどこからか、誰からか、つたえられ、個々が受け止めたもの紡ぎ出し、それらを自分自身の中で選択、判断、接続といった構築する作業の過程が「考える」ということと捉える。

◇はっする（発する）

他者との関係を形作るためには、想いを発する（美しい言葉、寛容な言葉、受容する言葉）ことが必要になってくる。そんな関係性をつくってくための表現として「発する」を捉える。

◇『研究授業における授業観察の視点』について

「想いの宛先～つたえあい、うけとめあう校内研究会～」

「あなた」から見れば「わたし」も「あなた」であり、「あなた」もまた「わたし」としとしてここに在る。「わたし」の存在の固有性は、「あなた」の存在を抜きにして「わたし」を「わたし」として呼称することはできない。「わたし」とは、他者の他者なのである。「宛先としてのわたし」と「宛先としてのあなた」がいることで自己存在が確認できる。宛先の喪失は自己の喪失につながる。想いを「つたえ、うけとめる」ためには、他者を慮る想像力と感受性が必要になってくる。そしてこれらは、行為（表現）として見える、聞こえる形として表す必要があるのではないだろうか。　「あなた」と「わたし」が伝え合い、受け止め合う関係づくりを研究会を通してつくっていく。

研究授業を参観するうえで、次の点に留意して授業観察を行っていきましょう。

①受容的な雰囲気で授業が展開されていたか。

・他者との関係（つたえる・うけとめるの関係）

・表情

環境（物理的、情緒的）から受ける影響の有無をみとる。 （下線部の注釈：環境に実在する動物（有機体）がその生活する環境を探索することによって獲得することができる意味/価値）

②授業構造（導入、展開、整理）と教師、生徒の活動（発問・指名・話し合い）がかみ合っていたのか。

☆「つかむ・つむぐ・つなぐ」について－授業構造、生徒が臨む姿勢としての、３つの「つ」－

☆「みとる・考える・発する」について－生徒と教師の能動的な行動としての、３つの「る」－

・３つの「つ」、３つの「る」と授業展開

「つかむ・つむぐ・つなぐ」≒「みとる・考える・発する」がどの場面で、どのように活かされ、行動として表現されているのかをみとる。

③３＋１（スリープラスワン）の視点

・授業観察において３つ良かったシーンを必ず見つける。具体的にどの時間帯でどのように良かったのかをみとる。

・１つ改善点を見つける。

・教科性に突っ込まない。→どの教科でも共通する視点で見る。

②の視点に関わって教師の働きかけや生徒の動きについてみとる。（「つかむ・つむぐ・つなぐ」や「みとる・考える・発する」の視点に関わった動きのみとり。）

⑤授業観察の方法

（１）　時系列で教師の活動（発問、投げかけ、やりとりなど）と生徒の活動（発言、つぶやき、関わり合いなど）を記録（メモ）していく。

（２）　（１）を記録する際、色をかえる、線で結ぶ、矢印、線で囲うなど、相互の関係性がわかるようにしておくと後でまとめやすい。

（３）　研究会の折に、どの場面で、誰が、どんな活動をし、それがその後の授業展開にどのように影響を与えたのか、また授業者の反応や展開がどうであったのかわかるようにしておく。

（４）　タブレットを各島に２台ずつお渡しするので生徒の活動場面を記録して下さい。

⑥研究討議について

（１）　グループ別討議

ア　時系列で教師の活動や生徒の活動でポイントになると思われるものを付箋に書いて貼り付けていく。※成果（黄色の付箋）、課題（ピンクの付箋）

イ　アをもとに本時における成果（３つ以上）と課題（１つに絞る）を明確にする。

ウ　発表者を決め、簡潔に発表する。

（２）　全体討議

ア　グループ別の発表を元に、本時における論点を明確にする。

イ　アをもとに参観者全員で成果と課題を検証する。

ウ　全体討議をもとに、今後の研究への課題を明らかにしていく。

⑦その他

（１）　本校職員以外の参観者もいずれかのグループに入って、授業観察を行いグループ別討議にも参加してもらう。

（２）　研究推進員は、グループ別討議の進行を行い円滑な討議運営をお願いします。

（３）　タブレットを使う職員を決め、研究会で活用する。

◇『授業を構成する上での留意点』について

①校内研究と関わって

「はじめに」にあるように、南西中学校校内研究会では、活用の部分である『思考力・判断力・表現力』に焦点を当て、動作（行為）を表す動詞『つかむ・つむぐ・つなぐ』を本校独自の視点としたこれらは１時間の授業の様々な場面に表れ、絡み合い、もつれ合いながら、本時の目標を目指すものだと考えられる。『授業の核となる部分』は絡み合い、もつれ合う過程の中で生徒が授業から何かを、「つかみ・つむぎ・つなぐ」過程の中にあると定義する。それぞれの教科によってそれをどう表出させるのかを考えたとき、それは『言語』や『身体』を中心としたものになると予想できる。言語であるならば、「書く、話す（発言する）、聞く」といった音声や文字を媒介にした表現であり、身体であるならば、体の動き、表情、しぐさといった筋肉の付随運動としての表現である。そうした「言語・身体」の表現が授業の中でどのように活かされているのかも重要な部分ではないかと考えられる。

☆絡み合い、もつれ合う過程の中で生徒が授業から何を、つかみ・つむぎ・つなぐのか。

☆「言語・身体」の表現が授業の中でどのように活かされているのか。

②授業改善プランと関わって

１学期につくった、授業改善のポイント及び授業改善プランとの整合性に留意し授業を構成する。もちろん当初プランを考えたときの授業実践の計画と違っていても差し支えありません。生徒の実態把握から、それぞれの教科で策定した課題、改善に向けての方策、授業改善のポイントや授業を支える取り組み等が、本時の中で位置づけられていればよいと思います。

☆本校の課題、改善に向けての方策が本時の中に生かされているのか。

☆授業を支える取り組みが本時の中に生かされているのか。

③教科の特性と関わって

それぞれの教科に特有の考え方、思想性があると思いますので、それぞれの授業者がもつ教科に対する想いや考えが反映されて良いと考えます。また、そうしたそれぞれの想いと①、②がうまく融合（しないかもしれないが）することで、これからの校内研究の方向性が見えてくるのではないかと思っています。

☆教科として押さえたい本質的な部分

☆学習指導要領で求められている目標との整合性

◊『指導案の形式』について（例）

※教科によって項目など若干異なると思いますので、下の形式にこだわらなくても結構です。

○○科学習指導案

指導者　○○○○

1．単元名　単元○　○○○「○　○○○○」
2．単元の目標
3．単元について
4．校内研究との関わり
5．指導計画
6．生徒の実態
7．本時の授業
　（1）日　時
　（2）場　所
　（3）教材について
　（4）本時の目標
　（5）展開

過程	学習活動	予想される生徒の反応	3つの視点に関わるねらい	授業改善のポイントとの関係
導入				
展開				
まとめ				

Ⅱ．教科研究（授業改善プラン、一人一実践）

①国語科
②社会科
③数学科
④理　科
⑤音楽科
⑥美術科
⑦保健体育科
⑧技術・家庭科
⑨英語科

教科研究の内容（国語）科

①研究テーマ

「話すこと・聞くこと」「書くこと」の技能を高める授業の工夫

②生徒に身につけさせたい力《教科の本質》

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度。

③研究の重点《確かな学力をつけるために》

「話すこと・聞くこと」に重点を置き、３年間を見通した中で系統性をもたせ、学年を追って技能が高められるようにする。

・１年…自分の意見をもち、わかりやすく伝えること。
・２年…自分の意見を相手・目的を意識して伝えること。
・３年…自分の意見を相手の意見と交流させながら深めること。

④生徒の実態

やろうとする意欲は多くの生徒がもっていると思われる。授業に対して真面目に取り組む生徒が多く、文章も書こうと努力している。しかし、受け身の生徒も多く個人差が激しい。また、基礎基本があまり身に付いていないので、学習したことが定着することは難しい状態である。繰り返し練習や家庭学習も少なく、特に漢字を苦手とする生徒が多い。

⑤具体的な評価の方法

・ワークシート等を工夫して使用することで、生徒の理解を確認したり、評価項目等を付け加えることによって、生徒自らが学習を振り返り定着につなげるようにする。
・小グループの話し合いを取り入れ、新たな気づきや意欲づけへもつなげたい。

⑥考えられる授業改善のポイントは何か

・３年間を見通した中で系統性をもたせ、各学年に見合った能力がつけられるようにする。
・高めたい力を具体的にし、ポイントをしぼって授業する。
・生活に生かせるよう、意識して授業を行う。

⑦教科における言語活動とは

国語科においては、実生活で生きて働き、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けることが大切である。社会生活に必要な国語の能力の基礎を身に付けるため、発表、討論、解説、論述、鑑賞、報告、批評などといった言語活動を通して、基礎的・基本的な知識・技能を活用し、他者と相互に思考を深めたりまとめたりしながら、課題を解決していく能力を身に付けることができるようにする。

⑧一人一実践実施状況

氏　　名	学　期　・　月	単　　元	学年　学級
川原　理恵	２学期・11月	「話すこと・聞くこと」の単元	２年２組
小泉　恵子	２学期・12月	「話すこと・聞くこと」の単元	１年２組

⑨今年度の成果と課題

本年度は、特に「話すこと・聞くこと」を意識して取り組んできた。どうしていけばよいか考えることで、発達段階に応じ３年間を見通した学習を仕組むことが、少しだができたと思う。小さな実践でも、積み重ねていくことが大切であることを感じた。また、小グループで「話し合う」という活動は少しずつ定着してきているので、今後も継続していきたい。

基礎基本については、まず漢字の定着を図るために宿題を出したり、小テストを行ったりしてきた。基礎・基本の定着を図りながら、社会生活に必要な力をつけていきたい。

授業改善のポイント〔中学校・国語〕

◇平成２５年度全国学力・学習状況調査〔中学校３年・国語〕

25 年度全国学力・学習調査より改善が必要な領域

〇主として「知識」に関する問題について

本校生徒は県全体及び全国に比べやや劣っている傾向がある。
特に、「書くこと」に関しては、「書いた文章を読み返し、目的に応じた表現に直して書く」、「伝えたいことがらを明確にして書く」という問題への正答率が劣っていた。
また、「話すこと・聞くこと」に関しては、「話すための材料を多様な方法で集めて話す」、「論理的な構成や展開を考えて話す」という問題への正答率が低かった。

〇主として「活用」に関する問題について

「知識」同様、本校生徒は県全体及び全国に比べやや劣っている傾向がある。
やはり、「書くこと」に関して「伝えたい内容について、根拠を明確にして自分の考えを書く」という問題での正答率が低かった。また、この「書くこと」に関しての「関心、意欲、態度」も、やや劣っている傾向があった。

〇重視される必要がある活動

- 文学的文章の優れた表現に関心が向くよう、効果的な心情の描写の部分を抜粋し整理し、自分自身が創作する際の参考とする学習活動。
- 相手や目的、方法を意識し、書く材料を分類し、まとまりごとに見出しを付ける学習活動。
- 文学的な文章について、表現の技法の意味や用法を指摘し合いながら、その効果について意見を述べ合う活動。また、その表現技法を取り上げて、自分の表現に生かす学習活動。
- 「話すこと」の学習において、話す前に、目的や相手を意識させ、具体的に考えて話し合いの準備をする活動。

◇平成２６年度山梨県学力把握調査〔中学校２年・国語〕

〇全体を通して

全県の生徒の平均正答率は 66.7%であり、本校の平均正答率は 64.1%とさらに、全県より劣っている。学習内容の定着が不十分であると考えられる。全県的な傾向としては、領域では「読むこと」、評価の観点では、「読む能力」、問題形式では、「記述式」に課題がある。本校の傾向としては、この全県の傾向と重なる部分もあるが、領域では「話すこと・聞くこと」、「書くこと」にも課題があることがわかった。この課題は、評価の観点でも同じ傾向が見られる。

〇「話すこと・聞くこと」について

「話すこと・聞くこと」に関しては、「場面や状況・相手に応じたわかりやすい言葉に置き換える」、「話し手の考え方と自分の解釈と確かめながら聞くことができる」という問題に対しての正答率が劣っていた。

〇「書くこと」について

「書くこと」に関しては、「読み手に分かりやすいように情報を整理して，箇条書きに書き直すことができる」、「相手意識や目的意識を明確にして必要な情報を整理することができる」という問題に対しての正答率がやや劣っている傾向があった。

〇重視される必要がある活動

「話すこと・聞くこと」

- 様々な場面で話す目的・相手・場面・手段などを生徒自身が具体的に考え、自分の意見を伝える学習活動。

「書くこと」

- 事実や事柄、意見など違いを明らかにして、伝えようとする内容が確実に書き表されているかどうかを検討する学習活動。
- 自分の考えを表すとき、その根拠を記述することに日常的に取り組む活動。

◇本校で課題であると考えられること

本校生徒の国語については、生徒の平均正答率から見ても、学習内容の定着の不十分さが明らかである。特にその中でも、全国・全県に比べ、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」についての課題が明確になった。この課題を克服するためには、中学校 3 年間の系統的な学習活動で確実に力をつけていける授業改善に取り組む必要があると考える。
「話すこと・聞くこと」「書くこと」は、学年をおって技能が高められるよう活動を行っていく。また、身につけた技能をその後の学習に生かすために、学級や学校の状況に応じて、学習活動を他領域・他教科等にも広げていく工夫をしていく。

授業改善プラン〔 中学校・国語 〕

・「話すこと・聞くこと」領域における授業改善のポイント

◇全国学力・学習状況調査

目的や状況、相手に応じて、伝えたい内容を効果的に表現したり、相手の意図を考えながら聞き取ったりする能力を高める学習活動が大切である。また、話合いにおいては、目的や場面に応じて、話題や方向を捉えて話し合ったり、互いの発言を検討したりすることが重要であると考える。また、目的に沿った話合い、見通しをもった話合い活動が効果的である。

◇山梨県学力把握調査

○決まった型やマニュアルに従って「話す」のではなく、話す目的・相手・場面・手段などを生徒自身が具体的に考え「話す」指導が必要である。

・効果的な単元を貫く言語活動を設定し、生徒が主体的に思考し判断する授業にする。その際、話す前の準備の段階や実際に話すときに目的や相手を意識させ、相手の状況を具体的に考えさせる。また、その際、「構成メモ」や「スピーチメモ」など友達に読んでもらい、聞き手側のアドバイスを得る場面を設定したり、聞き手の意見や感想を基に「話す」活動を振り返る活動を設定したりする。
・他領域、他教科でも活用する機会を意図的に設け、話す・聞く能力の定着を図る。
・学校生活の中でも、集会や発表会、スピーチなど公の場で話す機会を多く設定し、様々な場面で目的意識や相手意識をもって「話す」活動を取り入れる。

〈話すこと・聞くことの領域〉

◇本校の課題

・話す際に聞き手を意識して、相手に分かりやすく話すこと。
・自分自身の意見を、目的・相手を意識して伝えること。
・話し手の考え方と自分の解釈とを確かめながら聞くこと。

◇改善に向けての方策

・様々な場面で話す目的・相手・場面・手段などを生徒自身が具体的に考え、自分の意見を伝える学習活動の設定。
・話す前に、目的や相手を意識させ、具体的に考えて話し合いの準備をする活動。

◇具体的な取り組み（授業の構想）

【１学年】

（１）単　元　話し合う

（２）題材名　話題をとらえて話し合おう　　バズセッションをする

（３）指導目標

○意見と根拠、自分の立場や考えを明らかにし、相手の反応を踏まえながら発言することができる。（話す・聞く）
○話題や議論の流れを的確に捉えて話し合うことができる。（話す・聞く）

（４）学習過程

１　話合いに関心をもち、話し合いの目的や形式、留意点について認識を深める。
２　話合いの準備をし、バズセッションのミニ実践から留意点を意識する。
３　日常生活から話し合いに適した課題を見つけ、課題に対する自分の考えをまとめる。
４　バズセッションを実施し、記録を整理する。

（５）実践を行うにあたって

自分の意見を発表する際に、予想される問題点（反論や疑問点）がないか考えさせる。そして、その問題点に対する改善策や説明を用意させる。話し合う目的や相手を意識させる。

（６）言語活動について
・日常生活の中の話題について対話や討論を行う。

【２学年】
（１）単　元　　話し合う

（２）題材名　　小さな「物語」を探ってみよう！
相手の思いに寄り添ってメッセージを聞き出す力

（３）指導目標
○主体的に情報を収集したり、「小さな物語」を作ろうとしている。（関心・意欲・態度）
○相手の立場や意図を尊重しながら、伝える目的に応じて必要な情報を聞くことができる。（話す・聞く）

（４）学習過程
１「小さな物語を探る」という学習の目標と学習の流れを理解する。
２ インタビュー例を、小グループで考え、相手の思いを引き出す工夫について考える。
３「小さな物語」を作るための活動計画を立て準備する。
４ 取材する相手やテーマを考え質問事項を考える。
５ 実際にインタビューを行う。
６ インタビューの内容をまとめ、学級内で発表する。

（５）実践を行うにあたって
今回の学習は、その人物の魅力が伝わるようにまとめなければならない。そのために、インタビュー内容を検討したり、情報を取捨選択したりすることが必要になってくる。

（６）言語活動について
・インタビューして分かったことや、考えたことなどに基づいて発表する。

【３学年】
（１）単　元　　話し合う

（２）題材名　　自分の魅力を伝えよう
記者会見型スピーチをする

（３）指導目標
○社会生活の中で、聞き手の求めていることに応じ、対話的に自分のことを伝え、相互理解を図っていくことの重要性を理解する。（関心・意欲・態度）
○聞き手の求める情報を的確に捉え、自分の経験や知識を整理して話すことができる。また、聞き手の反応に応じて説明や話し方を工夫する。（話す・聞く）

（４）学習過程
１ 記者会見の形に関心をもち、対話的なスピーチを行うために必要なことを確認する。
２ 自分の魅力をアピールできる話題を選択し、記者会見の準備をする。
３ 話し方や聞き方を工夫して記者会見を行い、情報を伝えるために必要な力を身につける。

（５）実践を行うにあたって
「スピーチ」というと、一方的な情報提供や説得といった傾向が強いが、ここでは記者会見の形を借りることで、聞き手の話しての相互交流を組み入れた、対話的スピーチの活動をねらっている。そのため、この学習では、話し手（会見を受ける人）だけではなく、聞き手（記者）の役割も非常に重要である。聞き手が、話し手のスピーチからさらに話題を広げたり掘り下げたりする質問ができるように、聞き手への指導もしっかり行う。

（７） 言語活動について
・時間や場の条件に合わせてスピーチしたり、それを聞いて自分の表現の参考にする。

第２学年　国語科授業

南西中学校　　川原　理恵

１ 単元　　小さな「物語」を探ってみよう！！
～相手の思いに寄り添ってメッセージを聞き出す力～

２ 生徒の実態

男子 17 名，女子 15 名，計 32 名。男子生徒 1 名が特別支援学級に通級している。明るく元気な生徒達で，国語の学習においては，全体的に意欲的に学習に臨むことができている。

「聞く」学習においては，１学年においては日常生活に関わる様々な場面で，話し手の意図を考えながら聞く学習を行ってきた。２学年では，その１学年での学習をふまえて「目的に応じて聞く」学習を行ってきた。「目的をもって聞く」学習の中で，生徒の多くは聞くべきことは聞き取ってはいるが，なかには聞いているようで聞いていない状態に慣れ，話の要点を聞き取り，どのようにメモするか具体的な方法がまだ身についていない生徒も少なくなかった。また，聞き取った情報の中から必要な情報を取捨選択していくことも苦手な生徒も少なくはない。

また，今年度の県学力把握調査の結果から，「話すこと・聞くこと」に関して，「場面や状況・相手に応じたわかりやす言葉に置き換える」，「話し手の考え方と自分の解釈を確かめながら聞くことができる」という問題に対しての正答率が劣っていた。

本教材の中では，「小さな物語を作る」という，聞く目標を掲げ，自分自身が質問事項を考えることから始まる。ほとんどの生徒がインタビューの経験がなく，何のためのインタビューなのかという目的意識をもって質問事項を検討したという経験をもっている生徒はいなかった。

３ 指導の内容と言語活動

（１）言語活動設定の意図

本単元の言語活動は，言語活動例「ア　調べてわかったことや考えたことなどに基づいて説明や発表をしたり，それを聞いて意見を述べたりすること。」を，具体化したものである。テーマを決め，身近な人にインタビューすることを通して，緊張しながらも，意欲的に活動に参加させることができると考えている。このような活動を通して，テーマに沿って伝えるためにはどのような活動が大切なのか考えさせることで，目標の達成に近づけたい。

【本指導の計画において意識させたい「５つの言語意識」】
・目標意識　インタビューする相手の思いに寄り添ってメッセージを聞き出すために
・相手意識　思いを引き出させたい身近なインタビューの相手に
・場面状況意識　インタビューする場面で
・方法意識　取材する人を訪ねインタビューすることで
・評価意識　テーマに沿ったインタビューができたか。

（２）教材の特徴

２年生のこの時期になると，学校の中のことや友人についてなど，知らないことは少なくはなく，新しいことを発見する場面はあまりない。家族や身近な人たちに対しても同じである。

本教材は，身近な人にインタビューすることによって，新しい情報を獲得し，その人のもっている「物語」を掘り起こすものである。どんなところにも，だれにでも「物語」があるということを認識することは，日常生活の細部を豊かにすることでもある。

インタビューを通して，その人の新しい面を発見したり，思いや願いを聞いたりするこ

とは，本当に楽しいことだと実感するだろう。伝えあうことによって得られる喜びを確かなものにし，学習に対する意欲をもてるように本教材を設定した。

また，インタビューによって得たたくさんの情報は，伝える相手を意識して整理されなければならない。しかも，今回の学習は，その人物の魅力が伝わるようにまとめなければならない。そのために，インタビュー内容を検討したり，情報を選択したりすることが必要になってくる。このような人に話を聞く場面，情報を処理する力は，日常生活の中でも重要であり，中学生の時期にも体験させたいことでもある。身近な人の新しい面を発見しながら，それを魅力的に伝えることは有意義な学習であると考える。

4 指導目標

・主体的に情報を収穫したり，「小さな物語」を作ろうとしている。（関心・意欲・態度）
・相手の立場や意図を尊重しながら，伝える目的に応じて必要な情報を聞くことができる。（聞くこと）

5 評価規準

・積極的にテーマを求め，インタビューを行おうとしている。（関心・意欲・態度）
・インタビューの内容を検討し，必要な情報を得るために話を聞き取っている。（話すこと・聞くこと）

6 単元構想表

言語活動例　調べてわかったことや考えたことなどに基づいて説明や発表をしたり，それを聞いて意見を述べたりすること。

指導事項			重点	主たる学習活動	評価規準
ア	話の材料を日常生活からだけではなく，広く社会生活から収集すること。	小さな物語を探ってみよう		1，インタビュー例を小グループで考え相手の思いを引き出す工夫について考える。	・テーマにそったインタビューの内容を考えている。（①話す・聞く）
イ ウ	異なる立場や考えを想定すること。 資料や機器などを効果的に活用すること。		○	2，取材する相手やテーマを決めて質問事項を考える。	・取材する相手やテーマにそった質問事項を考えている。（②話す・聞く）
エ オ	自分の考えと比較すること。 目的に沿ってインタビューするために，相手の立場や考えを尊重し，目的に沿ったインタビューを進めるこ		○ ○	3，小グループになって，インタビューの仕方の練習をする。 4，取材する人を訪ね，インタビューを行う。 5，インタビューの内容を整理してまとめ，学級内で発表する。 6，学習を振り返る。	・自分の立てたテーマにそってインタビューを行い，必要な情報を得るために話を聞き取っている。（③話す・聞く） ・聞き取って得られた情報を再構成し，伝え方を工夫する。（④話す・聞く）

	と。				・積極的にテーマにそって，インタビューすることができた。 （①関心・意欲・態度）

（３）指導と評価計画

	主たる学習活動	指導上の留意点	Ａ の 姿	Cの生徒へのてだて
1	・「小さな物語を探る」という学習の目標と学習の流れを理解する。 ・山日新聞のインタビュー記事を読み，筆者が伝えたかったことや，筆者の取材の仕方を考える。 ・「物語」を探る構想をもつ。	・教科書の「学習の見通しをもとう」をもとに，学習のねらいと流れを確認させる。 ・文章に書かれた内容を読み取ることよりも，筆者が文章にまとめるまでの過程や，まとめ方の工夫を意識させる。 ・教科書にある活動手順を読み，学習の流れを確認する。	・学習のねらいを理解し，自分なりの学習の見通しをもつことができる。 ・筆者の文章にまとめるまでの工夫について理解している。 ・学習の流れを把握し，見通しをもっている。	・具体例をあげることによって，理解を深めさせる。 ・新聞記事の書き方の具体例の部分を示す。 ・教科書の例を参考に具体例を示す。
2	・インタビュー例を小グループで考え相手の思いを引き出す工夫について考える。	・インタビュー例として，テーマと相手を確認する。 ・インタビューでどのような質問がよいか考える。（４人グループ） ・グループごとに，検討した質問内容を発表する。	・テーマに沿ったインタビューの内容を考え，積極的に意見を交換することができる。 ・他のグループの発表を聞き，相手の思いを引き出す工夫について，さらに理解を深めている。	・友だちの考えを聞くことによって，質問の内容を考えることの大切さに気づかせる。 ・自分のグループにはなかった質問事項に気づかせる。
3	・「小さな物語」を作るための活動計画を立て準備する。 ・取材する相手やテーマを決めて事前調査を行う。	・活動計画を立てるために必要な事項について確認する。 ・取材する相手とテーマを確認し，事前調査の方法を確認する。 ・インターネットで	・必要な事柄を活動計画書にまとめることができる。 ・積極的に事前調査を行ってい	・活動計画書の見本を提示する。 ・個別指導を行

		検索する。	る。	う。
4	・取材する相手やテーマのもとに質問事項を考える。 ・小グループになって，インタビューの仕方の練習をする。	・事前調査の結果をもとに，インタビューの質問事項を検討し，メモする。 ・メモに沿ってグループごとにペアを作り，インタビューを実際に行う。	・取材する相手やテーマにそった質問事項を考え，相手の思いを引き出そうとしている。 ・相手から多くの話を引き出している。 ・話し方や言葉づかいにも気をつけている。	・質問例を提示する。 ・メモをもとに質問させる。
5	・取材する人を訪ね，インタビューを行う。	・練習をもとに身近な人を訪ねインタビューする。	・相手から多くの話を引き出し，それを工夫してメモすることができる。	・メモをもとに質問させる。
6 7	・インタビューの内容を整理してまとめ，学級内で発表する。 ・学習を振り返る	・得られた情報を整理し，伝えたいことを考え，発表メモを作成し，発表する。 ・今までの学習を振り返る。	聞き取って得られた情報を整理・再構成し，伝え方を工夫する。 ・積極的にテーマにそって，インタビューし，「小さな物語」を探ることができた。	・聞き取りメモを参考に情報の整理をさせる。 ・テーマに沿ったインタビューを考えることができたか見つめさせる。

6 本時の授業

1）日時　　１１月１４日（金）　５校時

2）対象　　２年２組　　生徒３１名

3）目標　（６時間計画の第２時間）

・主体的に質問事項を考えようとしている。　【関心・意欲・態度】

・相手の思いを引き出す工夫について考えることができる。【話すこと・聞くこと】

4）授業の展開

過程	生徒の活動	教師の指導	評価規準・評価方法
受けとめ	・学習目標を知る。 本時の学習目標を知る。	・学習目標を確認させる。	観察

る			
考 え る	・インタビュー例としての，相手とテーマを確認する。 身近な人の例として，宮田先生を取り上げる。 ・インタビューをする前の事前学習について確認する。	・インタビュー例の相手として，長澤先生の新たな魅力を紹介するテーマを確認する。 ・事前学習として，今回は「特別養護老人ホーム」について確認する。	観察 ワークシート 観察 ワークシート
広げる・深める	・インタビュー例を小グループで考え相手の思いを引き出す工夫について考える。 ・グループごとに検討した質問事項を発表する。	・４人グループの中で，質問事項について意見を出し合い，検討させる。 ・グループごとに検討した質問事項を発表し合い，お互いの工夫に気づかせる。	観察 ワークシート 評価規準 テーマにそったインタビューの内容を考えている。 観察
まとめる	・次時の学習内容を知る。	・次回から一人一人が「小さな物語」の作成準備に取りかかることを確認する。	

7　本時の評価の観点と具体の評価規準

	A 十分満足できる	B おおむね満足できる	C 努力を要する生徒への手立て
話すこと 聞くこと	・テーマに沿ったインタビューの内容を考え，積極的に意見を交換することができる。 ・他のグループの発表を聞き，相手の思いを引き出す工夫について，さらに理解を深めている。	・テーマに沿ったインタビューの内容を考えている。 ・ほかのグループの発表を聞き，自分たちの内容と比べることができる。	・友だちの考えを聞くことによって，質問の内容を考えさせる。 ・自分のグループにはなかった質問事項に気づかせる。

８ 授業実践を振り返って

１）授業改善のポイント

本校生徒の課題である，「話すこと・聞くこと」の領域は，学年をおって技能が高められるような活動を仕組んでいくことが大切である。具体的な授業改善のポイントとして，様々な場面で話す目的・相手・場面・手段などを生徒自身が具体的に考え，自分の意見を伝える場面の設定や，話す前に，目的や相手を意識させ，具体的に考えて話し合いの準備をする活動を取り入れていくことを考えた。

本授業においても、身近な人へのインタビューという場面の設定によって，目的・相手・場面・手段などを生徒自身が具体的に考え、活動させることをねらいとした。しかも，今回の学習は，その人物の魅力が伝わるようにまとめなければならない。そのために，インタビュー内容を検討したり，情報を選択したりすることが必要になってくる。このような人に話を聞く場面，情報を処理する力は，日常生活の中でも重要であり，中学生の時期にも体験させたいことでもある。身近な人の新しい面を発見しながら，それを魅力的に伝えることは有意義な学習であると考え実践した。

２）成果と課題

成　果

目標の提示が明確で，この時間何を学ぶのかが生徒達も，見通しがもてていた。また，身近な人へのインタビューという場面設定の中で，インタビューの相手（身近な音楽の先生）の選び方が良かった。日頃接している先生の知らなかった一面の発見に，生徒達の学習意欲がとても高まっていた。また，ゲストティーチャーとして，授業への参加のしかたも適当であった。

身近な人の「魅力」を引き出すインタビュー内容，という言葉がキーワードとなって，目的を明確にしながら，各グループでの活動が行われていたのは，生徒の自己評価，「本時の学習目標がよくわかった 95%　だいたいわかった 5%　わからなかった 0%」という結果からもよくうかがえる。また，小グループの活動に関しては，ほとんどのグループでよく話し合いが行われていた。これは，日常生活の中の，いちょうタイム・短学活・他教科でも，日々小グループの活動が行われている成果だと言える。

今年度，本授業を初めとして，国語科の授業の中で「話すこと・聞くこと」の活動を意識的に多く行ってきた。さらにその都度，「話す相手は？」「何のために聞くの？」というように，相手意識・目的意識を常にもたせるように工夫を重ねてきた。その結果，この 1 年間の学習を振り返ってみると，1 年次の「話すこと・聞くこと」の観点別評価【Ａ 36%　Ｂ 59%　Ｃ 6%】から，２年次では，【Ａ 36%　Ｂ 62%　Ｃ 2%】と，Ｃの生徒の数が減り，Ｂの生徒が増えるというように，少しずつではあるが力がついてきたことがうかがえる。

さらに，今年度初めの学習アンケートの中で，1 年次「話すこと・聞くこと」の学習活動に対して，楽しく積極的に行えたと答えた生徒は 38%であった。しかし，今年度の学習を振り返っての同問いに対して，楽しく積極的に行えたと答えた生徒の数は 65%と多くいたことは，今年度のねらいにそって授業改善を行ってきた成果だと感じている。

課　題

生徒個々の「話すこと・聞くこと」の意欲も高まり，技能も少しずつではあるが身についてきた。しかし，それを小集団や大きな集団の中で生徒同士で共有したり，深めたりという場面の設定が難しい。

また，決まった型やマニュアルに従って「話す・聞く」のではなく，その目的・相手・場面・手段などを生徒自身が具体的に考えるこのような機会を多く設け，活動させていくことがこれからの課題である。

第１学年　国語科学習指導案

授業者　小泉　恵子

１　単元名　本や文章に親しみ、本を紹介しよう

２　単元の指導目標

(1)　「読書」及び「読書リレー」について興味関心をもつ。
(2)　自分の考えやテーマに沿った図書の特徴をまとめる。
(3)　本の紹介を通して、自分のものの見方や考え方を広げる。

３　単元の評価基準

国語への関心・意欲・態度	話す・聞く能力	言語についての知識・理解・技能
①テーマに沿って本を選び、その内容を進んで紹介しようとしている。	①自分の考えや伝えたい内容を、相手にわかりやすく表現することができる。 ②発表を聞いて、自分の考えをもつことができる。	①文章を読む際に、理解しづらい語句などに注意して読んでいる。

４　単元・題材観

中学校の国語科は「国語を適切に表現し、正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い、言語活動を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる」ことを目標としている。

中でも、読書活動は各教科の「読解力」を支える大きな地盤ともいわれ、基礎学力の形成にあたってもきわめて大きな力となっている。豊かな本の世界と確かな実生活の体験との両方が支え合って、学力が着実に育っていくとも言われている。このことからも、中学校の時期に、学年に合わせた読書指導を行うことは大変意義深いことである。

テーマを考えて読ませることで、偏った読書でなく幅広い読書活動へつなげていきたい。また、読書というみんなができるものから、友達の発表（紹介）を聞く力、自分の考えを発表する力を育てたいと思い、この題材を設定した。

５　本時の授業

(1)　題材名　テーマに沿った本の感想を交流し、読書リレーをする。
(2)　目標　（２時間計画の第２時間目）
- 選んだ本の内容や面白さについて紹介することができる。
- 本の紹介を通して、自分のものの見方や考え方を広げることができる。

(3)　事前準備
- 事前に司書の先生に、６つか７つのテーマで、１年生に読ませたい本を１つのテーマにつき、５・６冊選んでおいてもらう。

・１時間目に、それぞれテーマと本を選び、朝読なども使い１週間で読むようにする。
・紹介カードの記入は授業で説明し、個人で書くようにする。

(4)　展開

	学習活動	指導上の留意点・評価
導入	１　本時の学習目標を知る。	・前時の学習内容を確認しながら、学習の見通しがもてるようにする。
	２　本の紹介文が書かれた「紹介カード」の「みんなに一言」を考えて書く。 ３　同じテーマ（６つのテーマ）を選んだ人同士で、本の紹介（読書交流）を行う。 〔テーマ〕 ・友情…４人　・絆…５人 ・家族…５人　・困難を前に…４人 ・命　…４人　・自分探し　…４人 ４　本の紹介を通して、次に自分が読みたいと思った本を決定する。 ・それぞれ本が決まったグループは、本を読んでみる。	・読んだ本のよさについて書かせるようにする。　（観察） （紹介カード） ・同じテーマを選んだ人同士のグループに、素早く移動できるようにする。 ・グループの人にわかるように、「紹介カード」を読むように促す。 （観察） （紹介カード） ・発表を聞きながら、次に読みたい本を考えるようにさせる。 （観察） ・同じ本を選ぶ場合もあるので、注意させる。　（観察） ・席を戻し、静かに読むようにさせる。
	５　授業を振り返り、本を選んだ理由と、本の紹介を通して感じたことや考えたことを書く。	・自分が思ったことを書くように助言する。

６　成果と課題

４人くらいの小グループで本の紹介を行ったので、あまり緊張することなく自分の思いを発表することができたと思う。生徒の感想の中に、「普段読まない本を読むことができてよかった」、「書いてあるものより、友達の発表を聞いた方が、読みたい気持ちが大きくなった」等、意図する成果も得られた。

また、発達段階にあった本を選ぶのは大変だが、司書の先生との連携で選んでいただいた。だが、もっと自分自身も関わる必要があったと考える。

課題は、読書リレーなので１クラス１か月くらいかかってしまい、複数のクラスを並行して行えなかったことである。時期をずらさなければならないので、改善が必要である。

教科研究の内容（　社会　）科

①研究テーマ
「適切な課題を提示し、様々な資料を活用する授業展開の工夫」
②生徒に身につけさせたい力《教科の本質》
・資料を多角的・多面的に調べ、課題に応じ適切に活用する能力
・一つの事象だけでなく、いくつかの事象との関連性を見出す力
・様々な事象について説明する力
③研究の重点《確かな学力をつけるために》
〈学習意欲を高めるためには・・・〉
・適切な資料の提示
・適切な課題や発問の工夫
・作業的な活動
〈基礎基本習得のためには・・・〉
・学習内容が理解できるワークシートの作成
〈思考力・判断力・表現力を育成するためには・・・〉
・社会的な事象を文章で説明したり、原因や結果をまとめたりすることができるワークシートの工夫
・自己評価を通して学習活動の振り返り
④生徒の実態
・読解力や数的処理の低さから、適切な問題解決が十分にできていない。
・家庭学習の習慣が見られず、学習意欲が低い。
・授業への参加意欲を感じられる人が増えている。
⑤具体的な評価の方法
〈関心・意欲・態度〉
・忘れ物・提出物・授業態度・活動の様子・ワークシートなどへの取り組みを通して、自ら課題を解決していくこうとしているかで判断する。
〈思考力・判断力・表現力〉
・基礎的・基本的な知識、技能を活用して思考・判断したことを説明・討論しているかをみる。具体的にはグループ活動の様子や観察、ワークシート、ペーパテストの記述形式の内容をみる。
〈技能〉
・目的に応じて資料を収集したり、そこから必要な情報を選択したり、読み取ったことを図表やグラフにまとめらているかをみる。
〈知識・理解〉
・社会科の各分野に対して習得すべき知識や概念を生徒がきちんと理解できているかどうかで評価する。
⑥考えられる授業改善のポイントは何か
・より厳選された適切な資料の提示、ワークシートの工夫、生徒を引き付ける課題の提示
小テスト実施、発問の工夫など。
⑦教科における言語活動とは
・思考・判断・表現すること、またそれを説明したり、討論したりすること。
⑧一人一実践実施状況

氏　　名	学　期　・　月	単　　元	学年　学級
鳥越　俊吉	２学期・１２月	（政治）第２節　７．裁判員制度	３年　２組
甲斐　弘志	２学期・１０月	（地理）中国	１年

⑨今年度の成果と課題
・生徒に「考えさせること」「表現させること」を特に意識して授業の構成を考えるようになった。しかし、小グループで互いに自分の考えを表現することが、まだまだできない。グループ学習の頻度を増やすなど、工夫・改善が必要に感じた。

授業改善プラン〔中学校・社会科〕

◇授業改善のポイント

○平成26年度教育課程研究協議会資料
　―　教育課程実施状況調査結果（地理・歴史）を受けて
　〈地理分野〉
　　山梨県は、全国と比較して基本事項に対する正答率が高い。一方で、地形図を読み取ったり統計値を判別したりする問題の正答率は低い。本校の生徒も同じ傾向にある。
　〈歴史分野〉
　　山梨県は、全国と比較して古代・中世に対する正答率が高い。一方で、近代の問いに対する正答率は低い。本校では、時代よりも出題形式によって正答率が異なる。特に選択式や記述式の問題などきちんと理解をしていなければ解けない事柄に対して苦手意識を持っている生徒が多い。

○本校の授業改善のポイント
　評価の観点で見ると、「資料活用の技能」と「思考力・判断力・表現力」に対して大きな課題があると言える。今後、地理では地球儀や地図帳、図表等様々な資料を活用し、資料の見方・考え方を養っていく必要性がある。歴史分野においては、基礎的・基本的用語を理解した上で因果関係や後の影響、歴史的な意義を考えさせて表現する学習が必要となる。

◇本校の課題

・読解力や数的処理の低さから、適切な問題解決が十分できていない。
・家庭学習の習慣が見られず、学習意欲が低い。

◇改善に向けての方策

①より厳選された適切な資料の提示
②ワークシートの工夫
③生徒を引きつける課題の提示
④発問の工夫

◇具体的な取り組み（授業の構想）

【１学年】

（１）単　元
　　原始・古代の日本と世界

（２）題材名
　　望月の欠けたることもなしと思えば（平安時代ー藤原氏の台頭）

（３）授業形態
　　個別学習

（４）言語活動について
　　藤原氏がどのように政権を獲得し保持できたかについて、図や資料を見ながら説明することができる。

【2学年】

（1）単　元

身近な地域の調査

（2）題材名

地形図の使い方

（3）授業形態

グループ学習

（4）言語活動について

地図上のきまりを正確に理解し、地図を正しく読み取ることができる。

等高線の意味を理解し、断面図を書くことができる。

【3学年】

（1）単　元

現代社会の見方・考え方

（2）題材名

効率と公正

（3）授業形態

グループ学習、集団討論

（4）言語活動について

課題に対し、根拠に基づいて、自分の言葉で説明することができる。

◇授業を支える取り組み

①「関心・意欲・態度」向上のために

・生徒が興味を持ちやすい教材を提供できるようにしていく。
・「ふるさと山梨」を活用し、郷土への愛着心を持たせる。
・作業的な活動を増やす取り組みを考えて実施する。

②「思考力・判断力・表現力」向上のために

・多面的・多角的に考察する力を養うためにワークシートや提供する資料を工夫する。
・言語活動を充実させる。
・自ら考え表現する場面や、グループで話し合いを行う場面を設定できるような授業を仕組んでいく。

③「資料・活用の技能」向上のために

・日常から地図帳や図表などに親しみ、利用する活動を習慣化して取り入れていく。
・様々な資料から得た知識を、表や図にまとめるワークシートを工夫する。

第３学年　２組　社会科　学習指導案

甲府市立南西中学校
授業者　鳥越俊吉

１．単元名　「裁判員制度」：模擬裁判をやってみよう

２．本時の授業

（１）日時　　平成２６年１２月１２日（金）２校時

（２）場所　　甲府市立南西中学校

（３）対象　　３年２組（男子１７名　女子１７名）

（４）題材　　「裁判員制度」模擬裁判をやってみよう

（５）ねらい　①積極的に裁判員制度にかかわろうとしている。〈関心、意欲、態度〉
②資料を的確に読み取り、自分の意見に対し、根拠をあげて適切に表現したり話しあったりしている。〈思考、判断、表現〉

（６）展開

時	学習内容	学習活動	指導上の留意点・評価
導入（７分）	○オリエンテーションと事件の概要、争点の把握	○模擬裁判における評議の流れを説明する。 ・課題の提示　つかむ	・前時の授業で確認した事件を簡単におさらいする。 ※事件現場の地図提示
展開（３５分）	○証拠調べ	○検察官と弁護士双方の立場からの主張を読む。	教科書Ｐ８９ （検察側・弁護側の主張）
	○評議	○小グループに分かれて、各々が裁判員になったつもりで評議を行う。つむぐ	前時に利用した証拠の分類と証拠調べの資料を利用。 ※ワークシートの利用 関心・意欲・態度
	○評議結果の発表	○被告人の有罪と無罪について、（判断した理由も含めて）、模造紙に書きだす。 ・黒板に掲示後、グループごとに発表。つなぐ	・重要なポイントから順番に並べて書く。 ・どの証拠の重要度が高いかを考えさせる。 ・無罪推定の原則についてふれる。 思考・判断・表現
	○討論	○発表後、お互いの意見、その他気がついたことを中心に意見を出し合う。	意見が少ないようであれば、グループで考える時間を与える。 関心・意欲・態度
	○判決	○有罪か無罪か挙手で判断。 （最終的な個人の判断）	必ず有罪か無罪か判断させる。
まとめ（３分）	○学習のまとめ	○評議を行っての感想や裁判員制度の意義や課題をまとめる。	関心・意欲・態度

第１学年社会科（地理的分野）学習指導案

指導者　甲斐　弘志

1　単元名　第１部　３章　世界の諸地域
　　３節　「アフリカ州」（帝国書院Ｐ７０～７７）

2　単元の指導計画（４時間扱い）
- アフリカ州の自然を調べよう（本時）
- アフリカ州の歴史を知ろう
- 植民地支配とアフリカ州の産業の関わりを調べよう
- アフリカ州の学習の整理

3　本時の学習

（１）日時　平成２６年１２月１２日（金）４校時

（２）場所　１年２組教室

（３）題材名「アフリカ州の白地図を作ろう」

（４）本時のねらい

①アフリカ州の白地図を作成するために、適切な資料を選択し活用している。
（意欲、資料活用・技能）

②学習課題に対して自分の考えを表現している。
（思考・表現）

（５）展開

段階	主な学習活動	指導上の留意点	資料等
導入 10	○前時の復習をする。 ○日本銀行券を見て、本時の学習内容について理解する。	・ガーナについては場所の確認をする。	・地図帳
展開 30	○アフリカ州にはどんな特色があるか、次のことについて予想する。 ・気候 ・地形 ○白地図を作成する。 ・沙漠を取り上げる。 「砂漠は進化している」ってどういうこと？ ○白地図作成の続きをする。 ・世界最長の河川 ・アフリカ州最高山　等 ・エジプト ・南アフリカ ・ガーナ	・略地図の描き方を教科書で確認する。 ・赤道、本書子午線に注意する。 ・時間に余裕があれば、特色ある国に触れる。	・地図黒板 ・ワークシート ・写真 ・ワークシート
まとめ 5	○教科書で、本時の振り返りを行う。	・ポイントにはアンダーラインを引くよう指導する。	・教科書

教科研究の内容（数学）科

①研究テーマ

数学的な思考力・表現力を育成する授業つくり

②生徒に身につけさせたい力《教科の本質》

数学的な思考力・表現力

③研究の重点《確かな学力をつけるために》

学習意欲を高めるために
- ・具体物を使った操作活動
- ・学習で身につけたものを日常生活やより進んだ学習へ活用をはかり、有用感を持たせる

基礎基本の習得のために
- ・反復練習

思考力・表現力・判断力をつけさせるために
- ・根拠を明らかにして、筋道をたてて体系的に考える指導
- ・互いに自分の考えを表現し、伝え合ったりする課題や場面の設定

④生徒の実態
苦手意識があり、始めからあきらめてしまう生徒もいるが、少しずつ努力する姿が見られるようになってきた。
基礎基本だけで満足してしまう傾向にあり、応用的な面への探求心に欠ける。
考えることの楽しさに気づける授業を心がけたい

⑤具体的な評価の方法
- ・生徒が自らの学習過程を振り返りながら、学習成果を実感し、定着していけるような評価方法を工夫する
- ・生徒の相互評価を取り入れていくことで、発想や表現の深まりをはかる。また意欲へもつなげていきたい

⑥考えられる授業改善のポイントは何か
- ・「思考すること」が活動の中に入る授業の工夫
- ・わかりやすい言葉で表現することができるようにする

⑦教科における言語活動とは
- ・新学習指導要領・数学的活動の例示されている「数学的な表現を用いて根拠を明らかにし筋道をたてて説明し、伝えあう活動」を議論したり、解決のプロセスを説明したり、その解決を振り返って発展させたり･･･といった場面で数学科における言語活動の充実を図っていく

⑧一人一実践の予定
※何学期の何月頃、何年のどの単元で実施するのか、大まかで結構ですので決めて下さい。

氏　　名	学　期　・　月	単　　元	学年　学級
井村　一総	２学期	相似な図形	3年2組
神尾　岳士	２学期	比例と反比例	1年2組
望月　秀太	２学期	関数の利用	1年1組

⑨成果と課題
- ・教科として3年間につながる、単元指導を考えていたが、今回うまく計画することができなかった。来期はこれに基づいた計画を考えていきたい

授業改善のポイント〔中学校・数学〕

◇平成 25 年度全国学力・学習状況調査〔中学校３年・数学〕

◇平成 26 年度山梨県学力把握調査〔中学校２年・数学〕

○全体を通して

平均正答率は、全県が 56.7%、本校は 51.3%で、全県に比べ、5.4p 低い結果となっている。また、問題形式ごとの正答率を比べると、記述式はともに 32.6%で差はないが、全体の 1/3 程度とあまりに低いこと、選択式は全県 67.4%、本校 47.6%で 19.8p も低いこと、短答式は全県 57.2%、本校 55.0%で 2.2p 低いがあまり差はないことがわかる。

○領域別の傾向

・数と式

数と式の領域全体の正答率を比べると、全県 62.0%、本校 62.5%で、わずかではあるが、本校が全県を上回っていることがわかる。その中で、全県に比べてもっとも正答率が高かったのは、2-(2)不等式から数量の関係を読み取る問題で、全県を 16.5p 上回っている。しかし、この問題の無答率は、全県 14.6%、本校 26.4%で 11.8p も高く、全県との差はもっとも大きい。逆に、全県に比べてもっとも正答率が低かったのは、2-(3)一次方程式を解く問題で、全県に比べて 8.2p 下回っており、課題があるといえるだろう。

・図形

図形領域全体の正答率を比べると、全県 56.3%、本校 44.9%で、11.4p も低い結果となっている。また、全ての問題で全県を下回っており、図形領域に関しては、課題が大きい。特に、全県と比べて低かった問題は、5-(1)①直方体のねじれの位置にある辺の理解をみる問題、5-(2)与えられた立体の見取図から投影図を読み取る問題である。それぞれの正答率は、全県、本校の順に、前者が 77.3%、65.9%、後者が 89.2%、78%で、11.4p、11.2p 低い結果となっている。無答率で着目すべきは、4-(3)垂線の作図の問題で、全県 9.6%、本校 20.9%で、11.3p も高い。

・関数

関数領域全体の正答率を比べると、全県 54.0%、本校 37.6%で 16.4p も低く、４領域の中で、県との差がもっとも大きいことがわかる。図形同様、全ての問題で全県を下回っており、大きな課題がある。特に、全県と比べて低かった問題は、6-(3)比例の表から x,y の関係を y=ax の式で表す問題で、全県 71.8%、本校 27.5%で、実に 44.3p も低い結果となっている。

・資料の活用

資料の活用領域全体の正答率を比べると、全県 43.8%、本校 36.0%で、7.8p 低い結果となっている。その中で、全県と比べて正答率が高かったのは、9-(2)(3)ヒストグラムから最頻値を読み取ったり、相対度数を求めたりする問題で、全県に比べて、11.2p、9.3p 高い結果となっている。逆に低かったのは、9-(4)２つのヒストグラムを比較し、情報を適切に選択して資料の傾向を読み取る問題で、全県 65.2%、本校 20.9%で、実に 44.3p も低く、関数の 6-(3)と並んで、県との差がもっとも大きく、課題がある。

○評価の観点別の傾向

・数学的な見方や考え方

数学的な見方や考え方についての正答率は、全県 42.8%、本校 33.2%で、9.6p 低く、３つの観点の中では差がもっとも大きく、一番の課題である。

・数学的な技能

数学的な技能の正答率は、全県 63.9%、本校 59.0%で 4.9p 低いことがわかる。

・数量や図形などについての知識・理解

知識・理解についての正答率は、全県 47.6%、本校 42.9%で、4.7p 低いことがわかる。

◇本校で課題であると考えられること

領域別では、「図形」「関数」「資料の活用」に、また、観点別からは、「数学的な見方や考え方」に大きな課題があることがわかった。模型づくりなどを通して、空間図形の位置関係を調べる活動や、比例・反比例の意味と性質を、表・式・グラフで表された x,y の関係から理解する活動、目的に応じてデータの傾向や特徴を捉えるために、代表値やヒストグラム等を活用して問題解決を図る活動を充実していく必要がある。

授業改善プラン〔中学校・数学〕

・「数学的な見方や考え方」を高める授業改善のポイント
◇全国学力・学習状況調査

◇山梨県学力把握調査
　模型づくりなどを通して、空間図形の位置関係を調べる活動や、比例・反比例の意味と性質を、表・式・グラフで表された x,y の関係から理解する活動、目的に応じてデータの傾向や特徴を捉えるために、代表値やヒストグラム等を活用して問題解決を図る活動を充実していく必要がある。
　その中でも、特に、「資料の活用」に焦点をあてて、授業改善にとりくんでいく。

〈数学的な見方や考え方〉
◇本校の課題
・事象を、数、式、図、表、グラフ等に表したり、それらの意味を読み取ったりする能力を養うこと
・数学的な表現を用いて根拠を明らかにし、筋道たてて説明する能力を養うこと
◇改善に向けての方策
・学習意欲を高める問題提示の工夫
・数学的活動を重視した授業展開の工夫

◇具体的な取り組み（授業の構想）
【１学年】（１）単　元　資料の散らばりと代表値
（２）題材名「どのバスに乗ればよいかな？」
（３）授業形態　一斉→個→一斉（必要に応じて小集団）
（４）言語活動について
・自分の判断とその理由を、わかりやすくまとめる。
・どちらのルートの何時何分発のバスに乗ればよいのかを、根拠を明らかにしながら説明する。
・互いに自分の考えを説明し合い、理解する。

【２学年】（１）単　元　１次関数
（２）題材名「東北・山形新幹線」または「さくらの開花予想」「どちらがさきに沸くかな？」
（３）授業形態　一斉→個→一斉（必要に応じて小集団）
（４）言語活動について
・自分の判断とその理由を、わかりやすくまとめる。
・表、式、グラフ等の数学的な表現を使って、自分の考えをわかりやすく説明する。
・互いに自分の考えを説明し合い、検討する。

【３学年】（１）単　元　標本調査
（２）題材名「英和辞典にのっている見出し語の総数を推測しよう」
（３）授業形態　一斉→個→小集団→一斉
（４）言語活動について
・見出し語の総数を推測する方法を説明する。
・いろいろな方法検討し、もっとも適切な方法を選ぶ。
・その方法で適切であったか振り返る。

◇授業を支える取り組み
（１）学習意欲を高めるために
・結論を与えて理由を考えさせるのではなく、どうなるのかを自分で考え、そうなる理由を数学的な根拠に基づいて説明するような課題を工夫する。
・分からない点は、いつでもまわりの友達と相談して考えられるよう、また、自分の考えを表現しやすいよう、オープンであたたかいクラスの雰囲気をつくる。
（２）思考力・判断力・表現力を育成するために
・じっくり考える時間を確保する。
・ある程度時間がたったところで、１つ２つ考えを発表させ、そりをもとにしてさらに考えを深めたり広げたりできるようにする。
・学習したことがらを使って、そう考える理由をわかりやすく説明し合う活動を取り入れる。
・小集団や、クラス全体で、検討する活動を取り入れる。
・学習感想などを取り入れ、自分や友達の考えを振り返る活動を取り入れる。
（３）評価の方法
・学習プリントやノートにまとめた考えを取り入れる。
・授業の中での発言やつぶやきを取り上げ、良い点は具体的にほめていく。

第１学年数学科学習指導案

授業者　望月　秀太

１．単元名　　比例と反比例

２．本時の学習

（１）日時　　平成２６年１２月１５日（月）　２校時

（２）場所　　１年１組教室

（３）題材名　　関数の利用「どの表が正しい」

（４）本時のねらい

・表の読み取りを通して身の回りの関数関係にある事象について考えることができる

・他の人の考えを聞きながら自分なりの考えをまとめることができる

（５）展開

	おもな学習活動	指導上の留意点	備考
導入 10	比例反比例の復習	関数の意味 比例反比例の特徴 グラフの形などを押さえる	
展開	課題 右の図の水槽に一定の割合で水を入れていく。 時間（x分）と水の深さ（$y$cm）の関係を表す表は，次の①～③のどれが正しいだろうか。 ① 時間 1 2 3 4 …／深さ 2 4 6 8 … ② 時間 1 2 3 4 …／深さ 1 3 6 10 … ③ 時間 1 2 3 4 …／深さ 4 7 9 10 … 	課題把握のために まず板書で問題をイメージさせる	
		板書後プリント配布	プリント準備
10		挙手で数を把握	
	問題の①②③、どれになるか予想する なぜそうなるのか、自分の考えをプリントに書く		
10	班になって各自の意見交換を行う	意見を一つにまとめるよう班に指示	
15	全体で考える（班ごとに発表） ・意見の対立→なぜ自分の意見以外のものはダメなのか ・みんな同じ→他の表は何を表しているのか ↓ 水槽の形の理解	表の表す意味について考える	
5	まとめ　どれも関数 特に①は比例である 学習感想を書く		

＜成果と課題＞

・授業では自分の考えを説明できるよう組み立てたつもりだが、課題の提示の仕方の工夫が足りないため、もしくは課題自体に問題があったのかもしれないが、生徒の考えを深める授業にはできなかった

・「みんなで考える」という空気が授業をつくり、お互いを能力でなく、個人の意見として交換し合い認め合う事につながって行くのだと思う。その部分の工夫が足りなかったと感じる。

・授業感想では「楽しかった」と書く生徒もあり、決して「考えること」を嫌がっているようではなかったので、授業改善を基にしっかり取り組むようしていきたい

第１学年２組　数学科　学習指導案

指導者　　神尾　岳士

１　単元名「比例と反比例」

２　本時の授業

（１）日　時　　平成２６年１２月１２日（金）　３校時

（２）場　所　　甲府市立南西中学校　１年２組教室

（３）対　象　　１年２組（男子１４名　女子１３名　　合計２７名）

（４）題材名　　貯金箱にいくら入っているかを考えよう。

（５）目　標　　①学習課題に対して，自分の考えを持ち，グループに伝えることができる。
②５００円玉の「枚数と重さの関係」を考えることができる。

（６）展　開

<table>
<tr><th></th><th>学習内容と生徒の活動</th><th>指導上の留意点</th></tr>
<tr><td>導　入
（3分）</td><td>1，貯金箱についての話をする。
・貯金箱に貯金しているか。
・「〇〇万円貯まる貯金箱」の存在を知っているか。など</td><td>・興味を持つように，いくつかのタイプの貯金箱を見せる。</td></tr>
<tr><td>展　開
（４０分）</td><td>2，本時の課題を知る。
【課題１】
ここに５００円硬貨だけを入れれば１０万円貯まる貯金箱があります。すでに中に５００円玉が入っていて，いくらか貯まっています。しかし，いくら貯まっているかはわかりません。そこで，中にいくら貯まっているかを調べてください。ただし，貯金箱を開けて調べることはできません。
・貯金箱の重さをはかることで貯金箱の中に入っている５００円玉の枚数がわかりそうだ。
・空の貯金箱の重さも必要だ。
・５００円玉は１枚何ｇなのか。
【解法１】算術的な解き方
６８８－６５＝６２３
６２３÷７＝８９
５００×８９＝４４５００円
【解法２】方程式を用いた解き方
５００円の枚数をｘ枚とする。
７ｘ＋６５＝６８８
ｘ＝８９
８９×５００＝４４５００円
・グループでの考えを発表する。</td><td>・解くための見通しを各自で考え，必要な情報が何かを知る。
・グループになり，各自で考えた見通しを発表し合い，課題していく。
・電子はかりを用意しておく
〇貯金箱の重さ・・・・６８８ｇ
〇空の貯金箱の重さ・・・６５ｇ
〇５００円玉の重さ・・・・７ｇ
【解法３】比例を用いた解き方
６８８－６５＝６２３
<table><tr><td>重さ</td><td>７</td><td>６２３</td></tr><tr><td>枚数</td><td>１</td><td>ｘ</td></tr></table>重さが８９倍なので、枚数も８９倍。
８９×５００＝４４５００円</td></tr>
<tr><td>まとめ
（７分）</td><td>ワークの類題を解き，定着を図る。</td><td></td></tr>
</table>

（７）評　価　　①学習課題に対して，自分の考えを持ち，グループに伝えることができたか。
②５００円玉の「枚数と重さの関係」を考えることができたか。

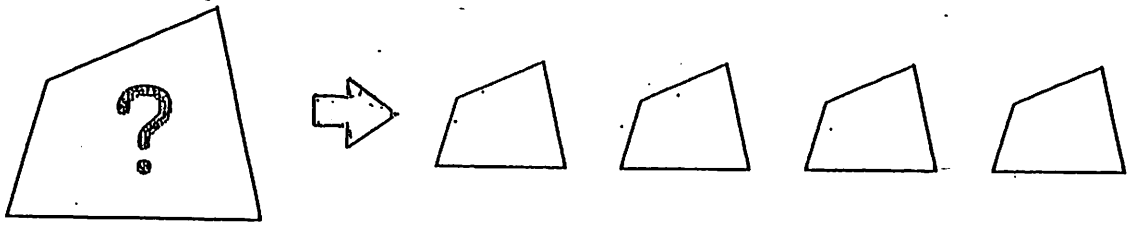
第３学年　数学科学習指導案

甲府私立南西中学校
授業者　井村　一聡

１．　単元名　相似な図形

２．　授業の視点
（１）　思考しようとする意欲をたかめるための効果的な課題提示ができていたか
（２）　個人で思考し、グループ内で話し合い、考えを深めていたか

３．　本時のの授業
（１）日　時　　平成２６年１２月５日（金）　３校時　　１０：４０～１１：３０
（２）場　所　　３年２組教室
（３）題　材　　合同な四角形をつくろう
（４）本時のねらい
相似な図形の相似比と面積比の関係を理解し、合同な図形に分けることができる。
相似比が１：２である図形の面積比が$1^2:2^2$　一般化すると
相似比がｍ：ｎである図形の面積比は$m^2:n^2$　を理解する。

学習の流れ	学習活動	指導上の留意点
○既習の学習内容を確認する	・これまでに学習した，根拠となる事柄について確認する。	・中点連結定理について復習する。
○教科書ｐ１３８のＱを考える（学習課題を把握する）	Ｑ　相似な２つの四角形で、その相似比が１：２の場合でも、大きい四角形を切って小さい四角形と合同な四角形を４つつくることができるでしょうか？ 	
	・紙を実際に切って、４つの紙が埋まるか確認する。	・４つの紙を切らないと埋まらないことを確認する。
	・中点連結定理を利用して作図方法を求める。	・補助線のひき方を考えさせる指導をする。 ・これまでに学んできた内容について確認する。
○発表する	・全体の前で発表する。 ・聞いた説明から，自分の考えた方法とどこが違っていて，どこがよいのかなどをまとめる。	・筋道たてて考察し、説明できている生徒に発表させる。 ・自分の考え方と比較・検討させることによって、考え方を広く、深くさせる。
○まとめる	・相似比が１：２である図形の面積比が$1^2:2^2$　一般化すると 相似比がｍ：ｎである図形の面積比は$m^2:n^2$　を理解する。	

４，成果と課題
課題が生徒にとって取り組みやすいものであり、授業中よく考え続けていた。思考しようとする意欲を高める効果的な課題だったが、最終的に理解し、次の課題で応用できるよう定着できた生徒は少なかった。数学的な思考力を育成し、定着できることが課題として残された。

授業改善のポイント〔中学校・理科〕

◇平成24年度全国学力・学習状況調査〔中学校3年・理科〕

全体の「正答数分布」は、全国平均と県平均との差はほとんどなく、わずかに県が上回っている。領域別の平均正答率も全国を上回ってはいるが、どの領域も６０％を下回っており、特に物理的領域においては、正答率が、４７．７％と著しく低い傾向にある。また、問題形式別の傾向においても全国平均は上回るものの、どの形式についても７０％を下回り、特に記述式においては３３．７％と低い傾向にある。

【物理的領域】
電流と電圧の関係及び電流のはたらきについての理解を探究的な観察・実験を通して理解を深める指導の充実を図る。

【化学的領域】
溶解度と質量パーセント濃度の関係につて、水に物質を溶かす実験を通して理解を深める指導の充実を図る。

【生物的領域】
身近な生物の観察などを通して、生物の身体のつくりとはたらきとを関連づけて理解する指導を図る。

【地学的領域】
時間概念や空間概念の形成を通して、地学的な事象・現象を形成する指導の充実を図る。

◇平成25年教育課程実施状況調査〔中学校3年・理科〕

この調査においても平均正答率は、全国平均を２．６％上回っているが、領域別に見るとどの領域も７０％を下回っており、その中でも物理的領域の「電流とその利用」全国平均正答率を上回るものの約５１％と低い。また、化学的領域における「化学変化と物質の質量」では、２０．７％と低い傾向を示している。双方の領域における出題は、グラフの読み取りから並列回路にかかる電圧、酸化銅の質量から反応前の動の質量を求める問題となっている。評価の観点からの分析では、「化学的な思考・表現」にか関わる設問での正答率が、４６．８％、出題形式では、設問数は少ないが記述式が４０％と低い傾向を示している。

【物理的領域】
電流と電圧の関係及び電流のはたらきについての理解を探究的な観察・実験を通して理解を深める指導の充実を図る。

【化学的領域】
化学変化の前後の質量と結びつく酸素の割合の規則性を化合や分解の実験を通して理解を深める指導の充実。

【生物的領域】
基本的な技能と知識の定着を図るとともに、生物のつくりとはたらきを関連づけて理解を深める指導を図る。

【地学的領域】
時間概念や空間概念を形成するために、目的に応じて図やグラフ等を活用して理解を深める指導の充実を図る。

◇本校で課題であると考えられること

平成２６年度山梨県学力把握調査結果から本校の特徴を見てみると、以下のようになる。

教科	学習指導要領の領域等	平均正答率	評価の観点	平均正答率	問題形式	平均正答率
国語	読むこと	53.7%	関心・意欲・態度 読む能力	58.9% 53.7%	記述式	55.8%
数学	図形 関数 資料の活用	44.9% 37.6% 36.0%	数学的な見方や考え方 数量や図形などについての知識・理解	33.2% 42.9%	選択式 記述式	47.6% 32.6%
英語	書くこと	34.1%	外国語表現の能力	34.1%	短等式 記述式	52.7% 48.0%

これらのことから考えて、学習内容を読み取り理解し、それを記述する能力や活用する能力が不足していることがわかる。このことも含め、本校の課題を以下のように捉えた。

①物質概念とエネルギー概念の構築
物質の運動とｴﾈﾙｷﾞｰの関係性や物質の粒子性についての気づき
②空間概念（空間把握、空間認識）、時間概念の構築
３次元空間を２次元の中に描く、またそれを俯瞰できる。
③学習言語（語彙）の獲得とその利用（表現）
①、②を構築するために必要な学習言語を思考または、理論との結びつきの中で身につけていくこと。

これらが各領域の中で関係性をもちながら、観察・実験を通して、様々な科学的概念を構築していくことを課題としていく。

授業改善プラン〔中学校・理科〕

・物理的、化学的、地学的領域における授業改善のポイント
◇全国学力・学習状況調査・山梨県学力把握調査
　どちらの調査からも伺えるのは、科学的概念形成の面から見れば、物質・エネルギー・空間をどう捉えさせ、概念形成をさせていくのかということになる。また、それらの概念を形成する上で得られた観察・実験の結果をどのように解釈させ、表現させていくのかがポイントである。あわせて解釈にともなう、数値処理やグラフ処理、図表の書き方についても指導の充実を図っていく。

〈物理的、化学的、地学的領域〉
◇本校の課題
　観察・実験等から得られた結果の分析、解釈、数値処理等を通して、化学的な概念の形成を図る活動を重視すること。
◇改善に向けての方策
　【①問題の把握→②仮説の設定(予想)→③実験・観察による検証→④結論(考察)→⑤伝達】という認識・理解のための方法の習得や、結果を分析して解釈し表現する能力を育てる活動を重視して授業を行う。

◇具体的な取り組み（授業の構想）
【１学年】
（１）単　元　「２　身のまわりの物質」

（２）題材名　「４　物質の姿と状態変化」

課題１
○液体と固体のロウのようすを粒子のモデルで表してみよう。
＜個→小集団→全体＞

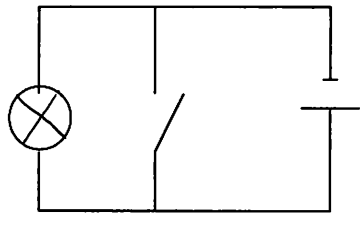
課題２
○「液体のロウに固体のロウを入れると浮くか沈むか」考えてみよう。
＜個→小集団→全体＞

（３）授業形態　「個の学び」→「小集団の学び合い」→「一斉の学び合い」の授業展開

（４）言語活動について
　日常の自然事象を学習内容と関連させて考え，科学的にイメージしたり，学習した用語を用いて説明する場面，実験や観察の結果をもとにモデル等を活用して考察したり，表現したりする場面を重視していく。

【２学年】
（１）単　元　「３　電気の世界」

（２）題材名　「第４章　電圧と電流の関係」



　左のような回路のスイッチを入れると、豆電球の明るさはどうなるか。
ア　変化しない
イ　明るくなる
ウ　暗くなる
※予想、実験、結果を通して回路を流れる電流とその両端にかかる電圧、また負荷のもつ抵抗との関係性を理解していく。

（３）授業形態　３～４人の小グループで課題に取り組む

（４）言語活動について
　仮説の設定(予想)、実験・観察結果を整理する、導き出される結論(考察)をまとめる、それらを他へ伝達する。グループ、学級内で知が共有されるために、「書く、言う、聞く」を重視していく。

【３学年】
（１）単　元　「３　運動とエネルギー」

（２）題材名　「第２章　力の規則性」　３　慣性の法則
●ひもで結んだおもりを引っ張る実験
①急激に強くひっぱった時
②ゆっくりとひった時　　ひもの切れ方はどう違うか

（３）授業形態　４名の学習グループ

（４）言語活動について
実験の予想をさせ、一人学習での予想とその理由を記述し、そのあと、グループでの練りあい活動をする中での予想とその理由を考え表現させる。

◇授業を支える取り組み
（１）学習意欲を高めるために
・知的好奇心を喚起するための教材教具の開発と工夫
・理科学習の使用感を感得するような自己評価の工夫

（２）基礎基本の習得のために
・学習事項を探究的に学習する研究の手段として
素朴概念を変容再構成させる工夫
・家庭学習を習慣化させる工夫（ワーク、プリント、レポートづくりなど）

（３）思考力、判断力、表現力を育成するために
・探究的な学習活動を意図的に仕組むとともに、生徒の思考判断・表現の過程が見とれるようなワークシート、一枚ポートフォリオなどを取り入れていく。
・ただ写すだけのノートから、家庭学習における学習の手引きになるようなノートづくりを指導していく。
・学習言語（理科に関わる語彙）を習得し、使いこなすための工夫。
・『書く』、『描く』表現力を育成するための工夫。
予想、結果、考察を言語や図表を用い説明し、発表する力を養うためにそうした機会を増やし、常によいものを評価していく指導

（４）具体的な評価の方法
・一枚ポートフォリオなど生徒の変容を見とれるような評価方法の工夫
・発表や討議の機会を通して言語活動を取り入れ、表現力を養い、評価を加えていく。
・家庭学習の定着を図るような、プリントの工夫により、課題を日常的に与え、その習慣をつくっていく。

教科研究の内容（理　科）科

①研究テーマ
　探究的に学習できる理科授業の工夫
②生徒に身につけさせたい力《教科の本質》
　・探究的に学習する態度
　・探究的に学習するために必要な思考力・判断力・探究力
③研究の重点《確かな学力をつけるために》
　（１）学習意欲を高めるために
　　・知的好奇心を喚起するための教材教具の開発と工夫
　　・理科学習の使用感を感得するような自己評価の工夫
　（２）基礎基本の習得のために
　　・学習事項を探究的に学習する研究の手段として
　　素朴概念を変容再構成させる工夫
　　・家庭学習を習慣化させる工夫（ワーク、プリント、レポートづくりなど）
　（３）思考力、判断力、表現力を育成するために
　　・探究的な学習活動を意図的に仕組むとともに、生徒の思考判断・表現の過程が見とれるようなワークシート、一枚ポートフォリオなどを取り入れていく。
　　・ただ写すだけのノートから、家庭学習における学習の手引きになるようなノートづくりを指導していく。
　　・学習言語（理科に関わる語彙）を習得し、使いこなすための工夫。
　　・『書く』、『描く』表現力を育成するための工夫。
　　予想、結果、考察を言語や図表を用い説明し、発表する力を養うためにそうした機会を増やし、常によいものを評価していく指導
④生徒の実態
　理科離れが叫ばれて久しいが、中学生の理科の実験好きはいつの時代も学校も変わらない。このことは本校生徒にも当てはまり、理科室にある実験機器や器具には子どもたちを引きつける魅力があるのだ。しかし、様々な事象に対する『なぜ』は時代的なものなのか希薄になっているのも事実である。
⑤具体的な評価の方法
　・一枚ポートフォリオなど生徒の変容を見とれるような評価方法の工夫
　・発表や討議の機会を通して言語活動を取り入れ、表現力を養い、評価を加えていく。
　・家庭学習の定着を図るような、プリントの工夫により、課題を日常的に与え、その習慣をつくっていく。

⑥考えられる授業改善のポイントは何か
　（１）　予想・結果・考察をどのように表現させるか。《科学的な探究の方法の習得》
　（２）　（１）を引き出すための教師の発問の工夫。
　（３）　素朴概念の変容と概念の再構成をどう進めるのか。

⑦教科における言語活動とは
　・予想、結果、考察を言語や図表を用い説明し、発表すること。
　・生徒相互での意見交換から自己の考えを補強したり、修正したりすること。

⑧一人一実践実施状況

氏　　名	学　期　・　月	単　　元	学年　学級
土屋賢一郎	２学期・１１月	運動とエネルギー	３年　３組
近藤　達夫	２学期・１２月	光の反射	１年
松本　　孝	２学期・１２月	動物の生活と生物の変遷	２年　１組

⑨今年度の成果と課題
　今年度は、授業改善プラン制作を通して、改めて指導におけるポイントを考えることができたように感じる。また、先進校視察などを通しても同様のことがいえる。いかに「学び合わせるか」また、学習事項を一般化、概念化させていくのかを考えさせられた１年であったと思う。授業実践では、１１月に土屋教諭による研究授業が行われ、拡大校内研究会において他校の先生方と研究協議が行われたことは、成果の一つとしてあげられる。しかし、授業者に負担をかけてしまい教科研究としての関わりが薄くなってしまった部分は、来年度への課題としたい。一人一実践についても個々の取り組みで終わっているので、教科内での交流につながるようにしていくことを考えていきたい。

平成２６年　１１月１４日（金）第５校時

第３学年３組理科学習指導案

場所　　被服室
指導者　　土屋賢一郎

１，単元名　　「運動とエネルギー」

２，単元について エネルギーは,物体を変形させたり、物体を動かすことができる潜在的な能力であるが、中学生にとってエネルギーの概念を獲得することはたいへん難しい。エネルギーについて正式に学習を始めるのは,中学校３年の後半になってからである。このエネルギーの学習では「他の物体に対して仕事ができる状態にある時,その物体はエネルギーを持っている」としてエネルギーの概念の導入を図ったところが,エネルギーについて正式に学習を始める前に生徒は,日常生活でエネルギーということば を使用しており,それが物を動かす作業と何らかの関係があることを感じとっている。生徒は,それま で持っていたエネルギーに対するイメージと,理科で学習するエネルギーの概念を別のものと考えて しまう傾向がある。そこで,生徒の身近なエネルギーについての認識を大切にし,興味・関心を喚起する教材を採用し、探究的な課題を多く取り入れることとした。この単元においては、まず「仕事」 の定義から入り、理科でいう仕事とはどのようなことなのかを考えさせること、仕事の量（エネル ギーの量）を数値的な量としてとらえ、様々な単位（Nm ＪＷcal）の関連性からエネルギーの変換 という視点も考えさせていこうと試みた。また力学的エネルギーなエネルギーの実験においては、 多様な教材を用いて、生徒自らの手で実験を行うことにより、エネルギーの測定、エネルギーに関 する現象の解明などを思考させる意図を持って授業を構成した。

３，校内研究との関わり

確かな学力の要素については、様々な見解があるが「基礎・基本の確実な習得」「思考力・判断力・表現力の育成」「学習意欲の向上」の３要素があげられる。南西中校内研究にでは、活用の部分である「思考力、判断力、表現力」に焦点を当て、授業改善を進めていきたいと考えている。本校独自の視点として動作（行為）を表す動詞「つかむ・つむぐ・つなぐ」や生徒と教師の能動的な行動として「発する・考える・みとる」を導入することで授業展開や授業観察の場に活用していきたいと考えている。以上の南西中学校校内研究会での基本構想を受けて、理科として、どのような形で授業改善に 取り組んでいくのかを検討した。

まず「基礎・基本の確実な習得」については、授業展開において「導入」で課題をとらえ、予想し、実験観察を行い、結果、考察を共有してまとめていくのであるが、それらの各段階（予想実験、考察）の段階で必ず、一人学習の場をつくったり、グループでの練りあいによって他者と討論したり、全体で共有化しながら思考するような様々な学習形態を状況にあわせて作りだすこ とを考えた。また授業内での素早い評価を実施してあげることや（授業内でのスタンプ評価） 一枚ポートフォリオ（OPPA）を活用することによって、生徒が自身の変容や変化を知り、授業 を振り返ることによって意欲を喚起することを意識した。各授業は授業プリント１枚を作成し、 毎回その裏に家庭学習できるような課題「つながるPAPER」をつくった。またOPPAの中に語彙 をまとめる項目をつくり、科学的な語彙を確実に身につけ、それらを様々な表現の中に活かせる ような習慣を大切にした。家庭学習の他の面として定期テスト一週間前のテスト勉強とともにテ スト後の一週間は、テストレポートつくりによって学力の定着を図った。

「思考力・判断力・表現力の育成」については、授業の中の「課題設定」（つかむ）をどうするのか、それによって論理的に筋道立てて考えること、それらの考えを「ひとり」→「４人班」→「全体」→「個人」というような流れの中で深めて（つむいで）いけるような授業展開を考え

ていく。さらに書くことを重視し「予想の考え」「実験の結果」「考察」などを文字や図をつかって豊かに表現しながら（つないで）いけるように授業プリントはなるべく最小限の言葉で、自分たちが広いスペースを埋めていけるように工夫したい。

「学習意欲の向上」このことこそ、確かな学力を作り出す、エネルギーであり、学ぶということの本質であろう。その意欲を高めるためには、学習材や実験方法などを工夫し科学に興味関心を持つような教材、そして学習課題を提供していかなければならないだろう。またOPPAなどにより、自己が大きく変化したその変容や実感し授業足跡を確認することで、大きい達成感を感じることが学習する意欲をつくりだすのだと思う。

毎回の理科の学習のあたっては、以下の事項を実施している。

①１枚ポートフォリオを活用し，学習履歴の内容を可視化し，学習前と学習後での生徒自身の変容の明確化を測ることで，意欲を持って，確かな学力を定着させる。 また，ポートフォリオに学習した語彙を記録させることにより，科学で使用する語彙を定着さ せ，科学的な表現力を向上させようとした。

②授業は毎回，ワークシートを使用し，その中でも自身の考え，認識がどのように変わっていったのか，またその授業においてわかったこと，感じたことは何かをまとめさせる。

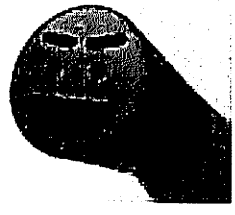
③授業内では，スタンプを使用し，机間巡視をすることで授業内での評価の場面をふやす。

④探求的に知識や概念を見出す活動としての実験を取り入れた授業を数多く実施する。

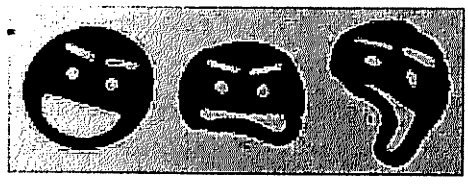
⑤家庭学習を促すための手段として，ワークシートの裏には，「つながるPAPER」として各授業のまとめ（復習）と発展的な発問，疑問に思った事やさらに調べてみたいこと等を書かせる。

４、指導計画

単元３　運動とエネルギー



樹脂でいろんな表情を作り出せるスタンプ。即座に評価できるのがいい



第１章 物体のいろいろな運動（８）

①速さとは
②記録タイマーの使いかた
③斜面と台車
④斜面と力（２）
⑤等速直線運動
⑥力の加わらない運動

第２章　力の規則性　（６）

①２力のつりあい
②力のつりあい
③３力合成
④合力、分力
⑤作用、反作用
⑥慣性の法則

第３章　エネルギーと仕事　（８）

①仕事とは
②仕事の原理（小さな力で仕事はできるか）
③仕事率
④仕事率その他馬力等
⑤エネルギーとは？
⑥位置エネルギーとは？
⑦運動エネルギーとは？（本時７／８）
⑧力学的エネルギーの変換

5、生徒の実態

本学級は,男子 17 名,女子 18 名,計 35 名から構成されている。理科学習で男女２名ずつの４名の班をつくり,グループ実験や,班の話し合い活動を多く取り入れている。男女の仲は良く,実験や観察は班で協力して意 欲的に取り組むことがてきる。またワークシートやポートフォリオなどの表記については真面目に記

述する生徒が目立つ。話し合いの場では,意見交換をするが考えを深める点では課題が残る。論理的に説明することを困難に感じていたり,感覚的な用語での説明になっている生徒も中にはいる。また,班の中で影響力のある生徒の意見か通りやすい傾向もみられる。したがって,まずは事物・現象に対して,論理的に考え，自分の考えを科学的に表現する力を育てていきたい。そのために,これまでの科学認識を活用して取り組むことができる課題を意図的に設定していく必要がある。

6，本時の授業

（1）日時　２０１４年１１月１４日（金）

（2）場所　南西中被服室（北館３階）

（3）本時の目標

①「運動している物体のもつエネルギーの大きさは、何によって決まっているのか」について考えるなかから、運動エネルギーの大きさは、物体の質量と速さによって決まることが、予想できる。

②運動エネルギーと質量の関係を実験から考察することができる。

③運動エネルギーと速さのおおまかな関係を実験からつかむことができる

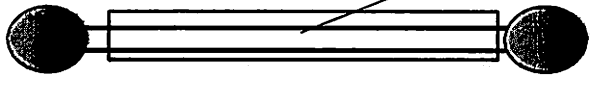
（4）本時の教材について

○ストロー吹き矢　　筒はストロー内径 φ6mm のもの

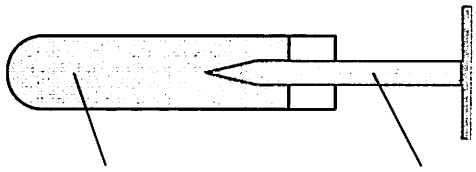
矢は　綿棒におもりとして　Ａはアルミ箔を巻き　　0.8g

Ｂはエナメル線（銅）巻き　1.6g　に 質量調節をしてある。

※透明なストロー 内径 φ5mm のものでカバー



○杭の打ち込み測定試験管　径１２mm 試験管に 低濃度の寒天　を入れ、ゴルフのティーをさす



寒天　４g／600　cc ゴルフのウッドティ

（5）本時の展開

流れ	時間	学習内容（生徒の活動）	教師の支援・指導	評価・備考
導入１	２	吹き矢の演示をみる 授業のねらいの提示	・興味関心をもって，授業に入れるように演出する。 「運動する物体がもっているエネルギーをなんというか」→運動エネルギー 「今日は、この運動エネルギーの大きさがどんな要素で決まるのか、そしてどんな決まりがあるかも推測してみよう」	（演示実験）

流れ	時間	学習内容（生徒の活動）	教師の支援・指導	評価・備考
導入２	３	落下実験の演示をみる	昨日は、位置エネルギーについて勉強したけれど、自由落下運動で速さはどうなっていると思いますか？高さを倍にすると、速さはどうなりますか？ 高さ　25㎝　50㎝　100㎝でのビー落下を見せ、高さと速さの関係を知らせる	（演示実験） 高さを倍にしても速さは倍にならない。高さを４倍にして速さは倍になることを押さえ、本日のヒントとする
展開１	５	実験方法を知る	どんな要素で運動エネルギーの大きさが決まるのか　どんな実験をすればよいか？ 実験方法の確認（ビースピ等）速さと質量の関係	（全体）
展開２	３	実験の予想をする	・運動エネルギーの大きさと質量の関係はどんな関係になるだろう？ ・運動エネルギーと速さの関係はどんな関係になるだろう？	
展開３	２５	（予想を出して実験） １、同じ質量で速さが変わると、移動距離はどうなるか？ ２、質量２倍の矢を使い、実験し、同じ速度のときと比べる	・予想の全体状況を出す （個人でいい） 例）速さと運動エネルギーは比例する？ 質量と運動エネルギーは比例する？	（グループ実験） （関）意欲的に実験し観察する （思表） 結果をどのように考察すればよいか考える
まとめ	15	結果からわかったことをまとめる	質量が倍で速さが同じなら大体威力は２倍になる。 発問「速さを２倍にしたら、威力は何倍になっているだろう	（全体討議）
		ヒントを聞く 自由落下で高さを２倍しても速さは２倍にならない。 運動エネルギーは質量に比例 運動エネルギーは速さが２倍になると４倍になる。	課題 「高さを４倍するとエネルギーは４倍だが、速さは２倍にしかならない。」このことから速さと運動エネルギーの関係を考えてみよう	（個人） プリントをまとめる

7、成果と課題

本授業は、運動エネルギーと質量の関係、運動エネルギーと速さの関係をつかむことをねらいとした。教科書の運動エネルギーと速さの関係を調べる教材では、定量的なデータをとることは難しく、運動エネルギーについての本質的な理解をすることは難しい。また、運動エネルギーを教える上では教科書では扱わない「速さの２乗に比例する」という運動エネルギーと速さの関係を扱う必要があると考えた。そこで、本授業では、生徒が興味関心をもって課題に取り組み、運動エネルギーと速さの関係を定量的に理解できるようにするために、ストロー吹き矢と寒天を用いたオリジナル教材を使用した。この教材は、楽しみながら、簡単にたくさんのデータをとることができ大変に有効であった。また、各班から出されたデータをOHPシートで重ね合わせることで、さらにたくさんの実験結果を共有でき、考察につなげられた点も有効であった。授業のまとめでは、実験結果が２次関数のグラフに似ている点から、運動エネルギーは速さの２乗に比例するという考察を導くことできたのは本授業において大きな成果である。反面、必要以上に実験を多くやらせてしまったため、班での討論の時間がきちんと確保できなかった点、また、実験のデータを見た生徒が失敗と判断してしまい、討論に発展しないグループがあった点など、実験をしぼり、討論の視点を明確にさせる必要があったことは課題である。

研究会では、

- 教材が身近なものからできており、生徒が興味関心をもって、意欲的に取り組んでいたのがよい。
- 先生の一言一言のサポートがすばらしい。
- １時間でまとめるのであれば、時間配分を考慮する必要がある。
- 「ＯＰＰ」は家庭学習につながっている。
- 「スタンプ」は評価を意欲につなげている。
- 「つながるＰＡＰＥＲ」は家庭学習のアシストになっている。
- 「ＯＰＰ」や「つながるＰＡＰＥＲ」は有効活用が可能である。多くの人に利用してもらいたい。

などの指導助言を得た。

第１学年　理科学習指導略案

指導者　近藤　達夫

1. 日　時　　平成２６年１２月１２日（金）　４校時
2. 場　所　　理科室
3. 題材名　　光の反射
4. 本時の目標
   - 鏡にうつる物の見え方についての実験を行い、結果や自分の考えを表現できるようにする。
   - 日常生活の中で無意識に経験している鏡の中にうつる像について，前回学習した「光の反射の法則」と関連させて考えることができる。
5. 展　開

過程	学　習　活　動	教師の支援と指導上の留意点
導入	1.前時の復習をする。 ・自ら光を出す物体を何というか？ ・光源を出た光は四方八方にまっすぐに進む。このことを何というか？ ・光が物体に当たるとはね返る。これを何というか？ ・光の入射角と反射角にはどのような規則性があるか？	・光は直進し、光が物体に当たるとはね返るということを確認する。 ・入射角＝反射角であることがわかるように板書する。
展開	2.本時の課題をつかむ。 **鏡にうつるものと鏡、それを見る人の位置にはどのような関係があるのだろうか** 3.予想を行う。 4.実験を行い、予想がどのような結果になるか確認する。 5.課題を行う。 **Ａさんは、Ｂ～Ｅさんの４人が、鏡によってそれぞれどこに見えることになるでしょう？**	・ワークシートに予想を書かせる。 ・鏡にうつる像は、反射光の延長線上にあることを確認させる。 ・はじめに一人で考える時間を確保した後、班で課題を追究するようにさせる。
まとめ	6.鏡にうつる物体が、鏡の向こう側にあるように見えるしくみをつかむ。	・鏡に物がうつって見えるのは、入射角＝反射角であるためであり、人間の目の錯覚によっておこる現象であることを確認する。

6. 成果と課題

小グループでの活動を通して、個々が関われる時間や空間を確保し生徒の主体性を喚起させることに配慮した。また，生徒一人一人が課題意識をもちながら取り組めるよう、予想、考察の場面では時間を十分にとって学習班で話し合う時間を確保するように配慮した。グループ活動を多く取り入れることで協同作業はスムーズにできるようになっていると思われるが、今後、学び合いのスキルアップや発表、表現の力をグループ学習の中でいかに身につけさせることができるかが課題である。

鏡にうつるものと鏡、それを見る人の位置にはどのような関係があるのだろうか？

（　　）組（　　）番　氏名

かがみ

物2

目

物1

[問題]
下の図で、Aさんは、B～Fさんの4人が、鏡によってそれぞれどこに見えることになるでしょう。図に書き込んでみましょう。（Aさんから鏡で見られない人もいるかも）

（　　）組（　　）番　氏名

かがみ

A　B　C　D　E　F

第２学年学理科習指導案

指導者　松本　　孝

１．単　元　　２　動物の生活と生物の変遷

２．本時の授業

（１）日　時　　平成２６年１２月１２日（金）５校時

（２）場　所　　２年１組　教室

（３）教材について

哺乳類を中心とした動物の消化吸収系、呼吸循環系、排出系、感覚神経系、筋肉骨格系と学習が展開されていく。本時は、哺乳動物の頭骨標本を教材として使い、標本を科学的な視点に立ち観察することにより、動物の多様性や共通性を「つむぎ」ださせていくことを念頭に置きたい。

（４）本時の目標

①　頭骨の態に注目し、意欲的に観察することができる。（つかむ）

②　頭骨の形態からその動物の食性や生活の仕方を考察することができる。（つむぐ）

（５）展　開

流れ	教　師　の　活　動	予想される生徒の活動	形態	留　意　点	個 へ の 対 応
導入	・いくつかの頭骨を見せて、それが何であるかテンポよく発言させる。	・頭骨を見て、何であるか考える。	全	観察の視点となるような事項を提示していく	
展開	・本時の課題を提示し，生徒の関心，意欲を喚起させる。 ♦頭骨の観察をしよう ・自由に観察して、2つの頭骨の相違点、類似点をあげさせる。 ・観察の結果をまとめさせる。	・本時の課題を把握する。 ◇頭骨の観察 ・自由な視点で、2つの頭骨の相違点、類似点を探す。 ・観察の結果をまとめる。	班 個	・各班に頭骨標本を2個ずつ配布する。 ・観察の視点にはこだわらないで、観察させていく。	♦机間巡視して遅れている班へ対応する。
まとめ	♦観察の結果を発表させる ・発表された事柄を整理して、そこから新たな「気づき」につながるようにする。 ♦動物の種類によって歯の形や大きさ，目の付き方，鼻などに共通性と多様性があることを理解させ，それぞれの動物の生き方を想像させる。	◇観察結果を発表する ・他の班の発表を聞き、新たな「気づき」を発表していく。 ◇動物の共通性と多様性を理解し，それぞれの動物の生き方を想像する。	個 班 全	・相互の情報を交換させ、食性の違いなどに気づかせる。 観察の結果から動物の生活を想像することができる。（科学的な思考）	

３．成果と課題

「実物のもつ力は強い。」これは頭骨標本を使うときに毎回感じる。本物のもつインパクトは、生徒の心を揺さぶるものがある。問題は、そこから哺乳類の多様性や一般性を整理させ、生物としての哺乳類を理解させていくのかにあると考えている。今回の授業では、雑多になってしまいポイントが絞りきれないまま進んでしまったことが課題としてあげられる。

観察する対象から、何を「つむぎ」出させ、既存の知識とどのように「つなぐ」のか、また他者とつながり、知を共有化させていくのかを今後とも考えていきたいと思う。

教科研究の内容（　音楽　　）科

①研究テーマ
　音楽活動に意欲的に取り組み、音楽を形作る要素を感じて表現に生かす生徒の育成

②生徒に身につけさせたい力《教科の本質》
　音楽的要素を感受し、表現に生かすことが出来るための基礎的な力を身につけさせる。

③研究の重点《確かな学力をつけるために》
　＊リズムに対する感性・音楽とことばに対する感性・旋律に対する感性を育てる。

④生徒の実態
　表現することの気持ちよさをある程度感じながら表現活動を行っている生徒が多いが、恥ずかしがって表現できない生徒もわずかにいる。音程に対する感覚や、リコーダー演奏についての技能は比較的良い。静寂を保ったりするのが苦手で、えんそうに集中するための準備の時間がかかるなど、丁寧に指導していかなければならない面はあるが、集中すると、指導内容への反応がよく、前向きに表現活動を行う。

⑤具体的な評価の方法
　＊実技に対する観察・評価テスト　　＊ワークシートの内容
　＊授業毎の評価の観点による観察

⑥考えられる授業改善のポイントは何か
　＊生徒が音楽的な内容を踏まえた表現を目指すために、身につけた基礎的な内容を実際の表現に生かせることが出来るような工夫。

⑦教科における言語活動とは
　＊音楽表現について音楽的な要素を交えた言葉でその音楽の持つニュアンスを伝えることが出来る。

⑦一人一実践の予定
※何学期の何月頃、何年のどの単元で実施するのか、大まかで結構ですので決めて下さい。

氏　　名	学　期　・　月	単　　元	学年　学級
末木由利	２学期・１０月	歌唱	１学年

⑧　一人一実践実施状況

１学年音楽科指導案

指導者　末木　由利

１，日時　　平成２６年１２月９日（火）　　３校時

２，場所　　音楽室

３，学級　　１年３組　（男子　１５名　女子２０名）

４，ねらい　旋律の流れを生かした表現の工夫をしよう
　①　旋律の流れ（曲の頂点と構成）を生かした表現をする。
　②　言葉の抑揚を生かした旋律の表現をする。

5，展開

時間	生　徒　の　活　動	留　意　点
１０	・リズム練習 付点のリズム	・両手ができない生徒は声だしと右手
１０	・曲全体の流れの確認 ・盛り上げるためにはどのように工夫したらよいか。 朗読からつかみ取る	・最も盛り上がっているところはどこかとらえる。 強弱記号・調・歌詞から（魔王の例） ・強弱の差をつける 強調する部分はどこか 柔らかく歌う部分はどこか ・強調する言葉をはっきり発音する ・響く声で強弱をつける
２５	・１番～３番まで共通して歌い上げるところはどの旋律かとらえる。（旋律の頂点の把握） ・その中で 音楽の流れがどのように構成されているか。感じ取る。（音楽のテクスチュアの理解と表現） ・旋律が盛り上がる前の部分の表現 ・１、２番と３番の表現の違いを感じ、違いを生かした表現をする。	・「あなたの毎日が～笑顔のために」 響く豊かな声を意識して歌う ・ ハーモニーの美しさ・sop+altoと tenの掛け合い→tuttiという音楽の流れのおもしろさ ・語りの部分　言葉の表現とグループ アクセント・発音・リズム ・３番の最後の表現最も盛り上がるところ→収束(未来・願い) 響きの保持・f→pの表現 子音の処理
５	・今日のまとめ	・本時の評価

６．授業の反省

歌声集会の後の授業だったためか、曲に取り組もうとする気持ちが薄く、授業に集中できない生徒がいた。教材選択を考えるべきであった。授業の内容についてはもう少し基礎的なことから、わかりやすい形で取り組むとスモールステップが必要な生徒もあきらめずに取り組むことができると思われる。

生徒の音楽的基礎力を高めるために導入に行ったリズムと今回の授業では行わなかったが器楽（リコーダー）の練習は生徒の気持ちを整える意味でも有効である。

⑨　今年度の成果と課題

生徒は授業によく取り組み、音楽を受け入れている。授業の初めに行うリズム練習とリコーダーの取り組みは今後も授業の導入として取り入れていく。この練習時に小集団を活用する。２～４名で課題を身につけていく。

音楽の楽しさの源である、リズムに乗り、旋律を奏で、ハーモニーを響かせること、等自分の力で表現できるか。

その基礎となる事柄（音楽的な要素）に気づき、それを組み合わせ、表現・感受につなぐことができるか。

スキルとしては身についているものでもそれを実際に音楽表現の中で生かすことができるか、関連を生徒が自覚できるようにより多くの気づきの授業を仕組まなければならない。また、生徒が表現に向かおうとする気持ちを高める工夫が必要である。

授業改善プラン〔中学校・音楽〕

◇分析から見える本校の授業改善のポイント

英語科の分析にある、『 書く力は「意欲」「単語力（語彙力）」「文法力」や物事を筋道立てて考える力「思考力」等で支えられる。』を『書く力は、「意欲」、「語彙力（学習言語の習得）」、「表現力」、「思考力」等で支えられている。』と書きかえれば、すべての学習の共通する課題として捉えることができるだろう。また、『書く』（出力）ことの前提として『聞く、読む』（入力）という側面を意識することも大切だと思われる。

①学習意欲の喚起
②学習言語の獲得
③聞き取る力、読み取る力の向上
④書く力の向上

◇本校の課題
歌唱については、積極的に声を出し歌うことが出来る生徒が多い。のびのびと歌う姿に好感が持てる。しかし、表現のおもしろさを感じ取ったり、音楽を自分なりの意思を持って表現するにはもう一歩であると思われる。表現の質を高めるための学習内容がなかなか定着しない。また、自分たちの表現に対してふり返りをし、さらに良くしようと取り組むことも少ない。表現していく過程で音楽のよさを感じ取りより工夫し向上していくという態度をとることが必要である。

◇改善に向けての方策
音楽はいろいろな要素を持って成り立っていることを教材の中に発見し、それを表現する事で音楽のよさに気づき、豊かな表現を目指して自ら工夫しようとする意欲を高めたい。

◇具体的な取り組み（授業の構想）

【1】学年

（1）題材　音楽と歌詞の関連を理解して表現を工夫しよう
歌詞と音楽の関連に関しては次のようなポイントがある。
・歌詞の内容と調・リズム・速度・強弱・旋律　等の関連
・歌詞の抑揚と旋律の表現
・表現を伝えるための日本語の発音や発声

（2）教材　鑑賞曲「魔王」　合唱曲「クラス合唱曲」
鑑賞曲「魔王」について
シューベルト作曲　ゲーテ作詞　　ドイツ歌曲　　独唱曲
独唱とピアノ伴奏
魔王・父・子という登場人物と周囲の情景や登場人物の心情を表現し、切迫した状況を表現したピアノ伴奏により演劇を見ているかのような臨場感がある。
合唱曲について　　混声３部合唱、ピアノ伴奏付　比較的容易な曲

（3）授業形態　　鑑賞曲　　個人　　グループ　　合唱曲　　グループ　　一斉

（4）言語活動について
音楽表現にはいろいろな要素が関わり、それぞれが関わって一つの表現となっている。
歌詞と音楽の関連については、旋律を形作る要素・歌詞の内容の表現としての音楽的要素・歌詞を明瞭に伝えるテクニックに関する要素と大きく分かれる。
まず初めの段階として、何が書かれているのかはっきりと伝える事を重点とし言葉の明瞭な伝え方や音の強弱など楽譜から読み取り表現するための言語活動。
次の段階は歌詞の内容や調性、発想記号などから音楽の性格をくみ取り表現のあり方を考えるための言語活動。
最後にその曲の内容を表現するためにはどのような工夫をするのか検討するための言語活動。教材や該当学年によって言語活動に用いられる音楽的な言葉にも、焦点となる音楽的要素も異なっていく。
さて、今回の授業については鑑賞曲「魔王」については曲を分析する作業を行って、音楽が作曲家によりいろいろな手法を使って形作られていて緊張感や曲の盛り上がりが出来ていることを感じ取らせたい。その際、言語活動に関連する音楽の要素は速度・音程・強弱である。
合唱曲に関しては、リズム・和音・音程が言語活動に関連する音楽の要素となる。

◇ 授業を支える取り組み
学習習慣について
音楽科では、持ち物を整理したり、移動をすばやくするために、ファイル・教科書・リコーダー等を一つの袋に全部入れて曲室に保管している。
音楽の基礎能力を高めるために
・　リズムうち、聴音、を授業の初め 5 分間で実施している。
・　歌唱の場合、詩をどのように伝えるか初めに朗読し、詩の性格をとらえる。
また、作詞者や作曲者がどのような思いで曲を作ったのか把握する。